
Ein Band der Rache

雨音ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E i n B a n d e r R a c h e

【Nコード】

N 1 6 1 5 G

【作者名】

雨音ナギ

【あらすじ】

近年、稀に見る工業が発達した国『アルマヴィオラ』
工業が盛んなことは有無も言わずだが、この国には三つの組織によって成り立っている。

「ミーンティア」「ソルド」「ラルフ」

ミーンティアは現在この国の主権を握っている一番の組織であり、ソルドはこの国唯一の過激派である。

一方、ラルフはこの二つの組織とは違い、中立を図っている組織で

あった。

全ては復讐のために。

十五年前、この世で唯一の肉親の姉を失い、『ある組織』に復讐を誓ったとある少年のお話。

最後まで約束を守ってくれないんだね。

僕は目的を果たすためなら銃を放つことも厭わないさ。

プロローグ

「姉さん止めてよ!」

まだどこか幼さを残している黒髪の少年の声が部屋中に響き渡る。

此処はとある町の倉庫の一角。

深夜の裏通りのせいか、辺りは闇に包まれ閑散としている。

数十分前、少年と少女の二人は追っ手を振り切るかのように走り続けていた。

そして、近くにあつた廃工場に身を隠した。

現在は使われていないのか部屋の中はカビた匂いが充満し辺りは闇に包まれている。

少女は息が上がっている少年を突如、壁に押さえつけ、手元にあつた鎖で手足で縛り近くの箱へと投げ込んだ。

「ごめんね……。これしかあんたを守れる方法が無いんだ」

この状況にも関わらず、少女は薄らと笑みを浮かべていた。

だが、笑顔は何処か引きつっており今にも泣き出しそうな表情だ。

少年も彼女を止めようと体を動かそうとするが自分の両足に付いている重りと両手を縛られた鎖が邪魔で自由に動けない。

「こんなこととして悪いと思ってる。でも、この世でただ一人の弟を守る……いや、あいつらから逃れるにはこれしか無いんだ」

「だからって……。こんなこと……」

目の前にいる少年を愛しそうに彼女は少年の淡い真紅の瞳を見つめながらこう言った。

「一つだけ約束してくれない？私の分まで絶対に生きてね？」

無論、それは絶対に嫌だと言わんばかりに少年は首を横に振る。

鎖が絡まって辛そうにしている彼を見やりつつ、少女は何処か寂しげな表情を浮かべながら彼から離れていった。

そして何かを決したように、懷から何かを取り出す。

それは 拳銃だった。

その時、少年は何かに気がついたように手を伸ばそうとするが、彼女との距離はかなり離れていてその手は届かない。

「そつか……。最後まで私の約束守ってくれないんだ……。でも、私のこと忘れないでね？」

彼女は自分の頭に銃口を押し付けた。

少女の頬に一筋の涙が零れ落ちていく。

「やめろ！」

少年は動かない両足をもがき続け、必死に彼女に向かって縛られている手を伸ばす。

だが、彼の制止も虚しく一つの乾いた銃声音は周りに響き渡り、少女の体はゆっくりと血の海へと沈んでいく。

それでも、彼女は少年を見つめ微かに笑っていた。

「畜生……。ちつくしょう！」

悔しそうに齒軋りをし、誰もいない倉庫の中で彼は動かなくなった少女の亡骸に向かって叫び続けた。

第一話

「　　」

妙な息苦しさを覚えて彼はうつすらと目を開けた。

目を開くとそこはあの血生臭い倉庫の中ではなくいつも寝起きをしている組織の寮の一人部屋。どうやら夢を見ていたらしい。

時刻は深夜零時を過ぎており、辺りは闇に包まれている。

唯一、窓から入る月の光が彼の姿を淡く照らしていた。

「そうか、あれから十五年か」

当時十にも満たない少年だった彼はとある出来事で唯一の肉親であった姉を亡くしていた。

今、その時のことが夢に出てきたのだろう。

「姉さん……」

あの時、どうして彼女を救ってあげられなかったのだろう。何度も悔やんでも悔やみきれない。無意識のうちに彼の手に力がこもる。

「一体、誰が姉さんをあそこまで追い詰めたんだ……」

走馬灯のように姉との思い出が蘇ってくるが、少年は首を横に振りあの時の記憶を思い出さないように努めた。

今思い出すと前に進めなくなる、と思い泣きそうになるのを堪える。

「　　楽しかったあの日々は二度と戻らないんだ……。でも、せめて……せめての償いとして今は姉さんの真実を暴くためにこうして

生きてる。真実が分かるまで死ぬわけにはいかないんだ。」

彼はそう呟いた後、体勢を整えてもう一度ベットに入りなおすが中々寝付けない。

再び深い眠りについたのは日が明るく始めた頃だった。

「……、……レン、アレン！」

突然、耳元での大きな声にベットで寝ていた青年は飛び起きた。

寝ていた彼は大声を出され、不機嫌そうな表情を浮かべており横を見ると煌いた銀髪を揺らし眉をつり上げた碧眼の瞳を持った青年が彼を見つめていた。

起こされたアレンは眠そうに目を擦っている。

「なんだ、ウィルか。どうしてそんなに怒っているんだ？」

するとたちまちウィルと呼ばれた青年の表情は呆れた表情へと変わっていき小さく溜息をついた。

「どうして怒っているのか？それは時計を見てから言ってください」

「……時計？」

訝しげにアレンはベットの真横においてある目覚まし時計の時刻を見やる。

シンプルなデザインが特徴的な目覚まし時計が指している時刻は午前九時。

すると彼は納得した表情を浮かべた。

「ああ、今日も遅刻したな」

「今日も遅刻したじゃないですよ！何回遅刻したら気が済むんですか！」

「……少し考え事してて眠れなかったんだよ」

小さく欠伸をしよう一度寝ようとベットに身を潜らせる。
だが、ウィルはいい加減にしろと言わんばかりの表情で彼を見やり、すかさずアレンの上にかけてある布団を引っ張り上げた。

「もういい大人なんですからそんなのは理由になりませんよ。それとそれ以上寝続けると言うのであればどうなるか分かってますよね？」

淡い碧眼の瞳が彼の真紅の瞳を見据える。

その目からは早く起きないと酷い目にあわせますよ？と言っているようだった。

「……わかったよ」

流石にそのような目で見られ恐怖を感じたのか、アレンは渋々かけてあった布団を取りまだ小さく欠伸をしながらもゆっくりとベットから起き上がった。

パジャマからフードの付いた漆黒の服に銀色の縁を彩られたいわゆる組織服と呼ばれるものに着替え部屋から一歩出る。

既にウィルは彼を起こした後、組織に戻り他の仲間も既に仕事に行っているようだった。

「ったく……。今日は休日なのに何で臨時出勤しなきゃなんのだ」
アレンは未だ文句を言いながらも一歩ずつ足を進めていき、寮から
出た後彼が所属している組織「ソルド」へと向かっていく。

この国“アルマヴィオラ”では、三つの組織によって成り立っている。

「ミーティア」「ソルド」「ラルフ」

ミーティアは現在この国の主権を握っている一番の組織であり、ソ
ルドはこの国唯一の過激派である。

一方、ラルフはこの二つの組織とは違い、中立を図っている組織で
あった。

彼が過激派のソルドへ所属した理由。

それは唯一の肉親であった姉の死の真相を知るためだ。

別にミーティアやラルフにも所属しても良かったのだが、この世の
中が理不尽な世界であることに不満を持っていることや姉自身もソ
ルドに所属していたこともあり二年前、今の組織に所属したのだっ
た。

多くの家が立ち並ぶ細かい路地を抜け、額からにじみ出る汗をコー
トの袖で拭きながら歩くこと数十分。

この国の南側にある都市・ヴィオラでもっとも目立つであろう建物
の前に辿り着いた。

建物は漆黒で覆われ、十字架のデザインが施されており、はるか昔
魔物が信じられていた時代に彼らから身を守るために必ず持ち物に
は施されていたといわれる水晶やサファイアを用いた宝石の護符が
門のいたるところに散りばめられている。

一般人が見たら間違いなく怪しいオカルト集団の建物だと勘違いす

るだろう。

実際、アレンが初めてこの建物の前に来た時は、異様な雰囲気に驚きを隠せなかったほどだ。

彼は散りばめられた宝石の護符が目立つ門に手を当て静かに目を瞑る。

その瞬間、微塵にも音を立てず門が開いた。

いわば、この技術は他の国の技術で使われている指紋認証技術のよくなものであり、自分の精神を機械に登録した人間のみしか開くことは出来ない。

万が一、登録した人間以外の人物が故意に開けようとする高電圧の電気ショックが体中を巡り感電死してしまう。

アレンは門を潜り奥にある茶色い古びた扉に手をかけた。

扉を開くと、既にメンバーは仕事を始めており、書類の整理に追われる者やこれから仕事に出かけようと準備をしている者がちらほらと見受けられた。

慌しく人が行きかっている中で、一つの視線がアレンを睨みつけていた。

その人物は部屋の中心にあるデスクに座っており、茶色の髪を撫でつけ、黒縁眼鏡の奥から漆黒の瞳を覗かせている。

「やっと来たのか？」

低い声音でアレンを睨みつけていたのは彼の上司に当たる人物のアドルフ・クライドである。

「申し訳ありません」

アレンは彼のデスクに近づき、視線を無視しながら感情がこもっていない声音でそう言って頭を下げた。

その様子を見てもアドルフは表情を揺るがせず、厳しい面持ちで彼を見つめている。

「もうこれで何回目だと思ってるんだ？お前が“普通の奴”なら即クビになってるぞ？」

「はい……。以後、気をつけます」

「もうその台詞は聞き飽きた」

アドルフはもういい加減にしてくれという表情を浮かべて小さく溜息をつきデスクの上においてあるさまざまな資料に目を落とし、とある資料数枚をアレンに手渡した。

「仕事だ。お前は、遅刻したんだからな。きつちりと働いてもらうからな」

「分かってますよ」

彼はアドルフに対して苦笑いを浮かべながらも手渡された資料に目を通す。

重要な書類と言われ、渡された紙はたったの二枚だけで、アレンは不思議に思うが、口には出さない。

彼は畳んである一枚目の紙を開いた。

そこにはこの国の主要となる部分の地図　この国で利用されているもっともポピュラーな全国版の地図が詳しく載ってあった。

軽く目を通して閉じた後、一枚目よりは少し小さい二枚目の紙を開く。

こちらは一枚目とは違い、今回の仕事内容について書かれてあった。

「今回の仕事は……アレシアの第五地区？アレシアはミーティアの管轄じゃ？」

アレンの言う通り、この国の三大組織の一つミーティアはこの国の北側のアレシア地域を本拠地にして活動をしている。

無論その周りの出来事はミーティアが全て管理しており、アレシアとは反対側に位置するヴィオラに活動拠点を置いているソルドが手を出すことは無い。

「確かに、お前の言うとおりだ。だが、状況が変わったらしくてな」

「状況が変わったとは？」

資料を横目に見ながらもアレンは眉をひそめ、データ入力に勤しんでいる彼の姿を見据えた。

「まあ……詳しいことは向こうに行って聞いたほうがいいだろう。」

お前のパートナーのウィルも一緒に行くようにな」

「……？わかりました」

上司の様子がおかしい、とアレンは訝しげに思い少し頭を傾げながらも資料を一通りざっと読み終える。

そして、踵を返し窓側にある自分がいつも座っているデスクへと腰を下ろした。

第二話

「もう仕事入ったんですか？」

そう言っアアレンに話しかけてきたのは隣のデスクで資料を片付けていた彼より二、三歳ぐらい若いであろう灰色の髪でココア色の瞳が特徴的な青年だった。

彼のデスクには、はみ出るぐらいに紙の書類が積み重なっており、どうやら今日は書類の量が多いらしい。

しかし、当の話しかけた本人はたいして気にもせずテンポ良く仕事を片付けていつている。

アレンはそんな忙しそうな彼に目を向けながらも装備を整え、出かける準備をしていく。

「まあな。ったく、アドルフもあんなに怒らなくてもいいと思うんだがな。あいつに牛乳を数百本飲ませてやりたいぐらいだ。そう思わないか？スコット」

スコットと呼ばれた青年は彼の言葉に苦笑いを浮かべながらも自分のデスクの上にある膨大な資料をパソコンに打ち込んでいく。

「まあ、確かにそうですね。今回の仕事は何処へ？」

「北のアレシアだ」

そう言葉を聞いた瞬間、スコットの作業していた手を止めると、アレンの方を振り向き、首を傾げ、怪訝そうな表情を浮かべる。

「アレシア？アレシアは、ミーティアの管轄地じゃありませんでし

た？」

「ああ、僕もそう思ってたんだが……。アドルフが向こうで詳しく聞いてこいと」

「そうなんですか……」

まったく面倒なことだ、と呟きながらアレンは座っていた椅子から立ち上がり彼がいつも仕事の時には持ち歩いている漆黒のデザインの二丁拳銃をあまり人目につかないよう黒いコートで隠し腰のホルダーに収める。

その様子を見ていたスコットは中断していた片付けの作業を再開しながらもこちらを向き、心配そうな表情を浮かべてアレンを見つめていた。

「気をつけてくださいね？」

「心配しなくても大丈夫さ。へまはしない」

「自分を過大評価し過ぎて油断しないようにしてくださいよ？」

「わかってるよ、じゃ後は頑張れよ」

書類作業に追われているスコットに背を向けたアレンはやたらとオカルトチックが目立つ扉を開け、たくさんの人々が行き交う街中へと歩き出す。

そして、今日の天気の良いさに感慨深い思いをしつつもこの都市の唯一の駅「ヴィオラステーション」へと足を進めていった。

まだお昼前だというのに街の大通りには、たくさんの露店が立ち並

んでいた。

時折とある露店の前を通り過ぎると香ばしい焼き鳥の匂いや野いちごをふんだんに使った甘酸っぱいパイの匂いが鼻につく。

（そういえば、まだ朝は何も食べてなかったな……。朝食がてら何か食べるか）

そう思い立ち暫く商店街の道を数分歩いた後、彼はとある露店の前で立ち止まった。

店の看板には「サンドイッチ専門店・Merry's House」と書いてあり、サンドイッチ専門店であることは誰が見ても一目瞭然だ。

「おお、アレン、いらつしやい」

店主は立ち止まっているアレンの存在に気が付いたのか、にこやかな表情を浮かべるとこちらを見据えた。

実はアレンはこの店の店主とは既に顔なじみで小腹が空いたときにはこの店にいつも立ち寄り、サンドイッチを買っていた。

そのことからいつの間にかこの店の常連客となっていたのである。彼も笑顔で店主に返す。

「やあ、メリーさん。今日のおススメ何がある？」

「今日は、新鮮な食材がたくさん入ったからね。色んな食材をふんだんに使ったミックススペシャルがお勧めかな？」

「じゃあ、ミックススペシャルを二つお願いできるかな？」

「あら？今日は結構食べるのね。二つで銅貨2枚だよ」

「連れがいるもんでね。いつも起こしてもらって悪いからさ。これ、代金ね」

アレンはポケットから黒い財布を取り出して、店主に神聖的なデザインが施された二枚の銅貨を手渡し、普通よりふた周り大きいと思われるサンドウィッチ二つを受け取った。

あまりにも大きいため茶色い紙袋からは今にもサンドウィッチがはみ出しそうだ。

「その風貌を見てると今日は郊外へ行くのかい？」

「ん、まあね。北のアレシアにちょっと」

「アレシア！？それまたずいぶん遠くな場所に行くんだねえ」

「此処からじゃ、この国の最新工学の技術を使っても半日は掛かるね。なんせこの国の土地は広いからさ」

「そりゃ、大変だね。じゃあ、これ、持っていきな」

店主はそう言うのアレンが持っている茶色い紙袋の中にもう二つ小さなサンドウィッチを入れた。

突然の行為にアレンは驚いて、咄嗟に財布から銅貨を出そうとした。しかし、それを店主が手で制する。

「えっ？いいの？お金は……？」

「これはいつもうちに來てるサービスだよ。仕事頑張ってきたな！」

「分かった。ありがとな！メリーさん！」

彼女に右手を上げて軽く手を振り、更に量が増えたサンドウィッチが入った茶色い袋を両手で抱えると、こちらに向かつていく人々とすれ違い、露店がひしめいている大通りを抜けていく。

交差点を通り、公園を抜け、やがて駅前広場にたどり着くと純白に金があしらわれた大きな時計台の前でウィルは上を見上げしきりに時間を気にしながら、アレンを待っている姿が目に入った。

第三話

「遅いですよ、アレン。待ち合わせ時刻から既に十分経過してます」
待たされて不機嫌なのか少し苛立っている声音でこちらに走り向かってくるアレンに対してそう言った。

彼は申し訳ない表情を浮かべ紙袋を持ったまま、悪いなと言いつて、軽く頭を下げた。

「ちよっとお腹が空いてこれ買ってたものだから」

彼は自分が持っていた茶色い紙袋を指してウィルに見せた。

何が入っているのかと思い、ウィルは茶色い紙袋の中身を覗き込む。袋の中身を見た瞬間、彼は驚いた表情を浮かべた。

「サンドウィッチ？それにやけに大きいサンドウィッチですね」

確かに普通のサンドウィッチよりふた周り大きい。

例えて言うとならば、ハンバーガーのビックサイズぐらいだろう。

その大きいサンドウィッチが四つも入っているのだ。

驚くのも無理は無い。

驚いている彼をよそに、アレンはサンドウィッチが入った袋を持ち直し、再び話し始める。

「これ、ミックスサンドって言って、結構美味しいんだ。向こうに着くまで此処から数時間は掛かるだろう？丁度いいと思ってさ」

待ち合わせ時刻に遅れ、その理由がサンドウィッチを買っていたという事実ウィルは小さく溜息を付くしかない。

「まったく……。もうそろそろ列車の出発時刻になりますから、急いで4番ホームに行かないと間に合いませんよ?」

ウィルは紙袋を持ったアレンをちらりと横目で見やり、人を掻き分け駅のチケット売り場へと入っていく。

「って……ちょっと待てよ!」

彼の少し冷めた態度に若干焦りを覚えながらも、アレンは置いていかれないよう周りがたくさんの方が行きかう中、早足でウィルの後について行った。

「特急の北のアレシア方面です……。いや、二人です。銀貨二枚ですな」

アレンはウィルの姿を追っていくと、既に彼はチケット売り場で特急のアレシア行きチケットを購入しているようだった。

ウィルは小窓の向こうにいるチケット販売員に銀貨二枚を手渡し、二枚の赤色のチケットを受け取ると、こちらに向かって走ってきたアレンに手渡す。

「チケットは買っておきましたよ。さて、四番ホームへ急ぎましょうか」

「あ、ああ」

見失わないように走ってきたせいかアレンは荷物を持ち、肩で息をしながら、四番ホームへと続く階段をウィルと共に一歩づつ降りていく。

ホームに着くと、黒く風情を醸し出した大きな列車が止まっており、今か今かと出発を待っていた。

アレン達は乗車口の前にいる駅員にチケットを手渡し、切符を切ってもらった後、すぐさま列車に乗り込むと、彼らの乗車と同時に列車のドアが閉まり、一歩ずつ加速し始め列車は動き始めた。

「何処に座る？」

「こちら辺にしましょうか」

列車が発車した後、彼らは前の車両から最後尾の車両へと移動し、机を隔てて向かい合って席に座り腰を下ろしていた。

今回乗った列車は、昔使われていた在来線の黒い列車の為、少し揺れが気になるが、二人は構わず話を続けている。

「じゃあ、食べるか」

そう言つてアレンは持っていた茶色い紙袋を机の上に置きサンドウィッチを取り出し、ウィルに手渡した。

「ありがとうございます、それにしてもこのサンドウィッチ本当に大きいですね……」

「ん、まあな。二つ食べたなら夜まで持つと思うぞ？まあ、食べてみなよ。美味しいから」

笑顔でアレンにそう促されてウィルは一通り見回すと大きなサンドウィッチを両手で持ち。一口食べる。

すると、ウィルの表情はさっきまで不機嫌だった表情がたちまち明るくなった。

「確かに……！これは美味しいですね」

「だろ？やっぱり、メリーさんのサンドウィッチが一番だな」

アレンも袋からサンドウィッチを取り出し、これでもかというぐら
いに頬張り食べ進めていく。

二人がサンドウィッチを食べ進め、一つ目の長いトンネルを抜けた
頃、列車の景色はいつも見ている穏やかなヴィオラの景色ではなく、
工業的な建物が立ち並ぶ景色に変わっていった。

第四話

「どうやら、ヴィオラを抜けて、第二工業都市のフィオナの近くまで来たみたいですね」

「ああ。そうだな。だが、フィオナだったらアレシアまでまだまだだろう。先は長いな」

「そうですね」

第二工業都市とあってか、工業の発達が他の地域に比べてめまぐるしいようだ。

工場からは常に煙突から煙が出ており、工場の中で人々が汗を流し働いていることは何となく想像できる。

他の地域ではまだ未発達な階段が動いて人々を楽に移動させる技術のエスカレーターや

今までの無線回線から、高速に大量のデータをスムーズに送れる光通信といったものまで日常的に使われているらしい。

「工業都市とあってか、色々と発展しているみたいだな。ヴィオラからこれだけ近いのに

仕事に関係していなかったこともあってまったく行っただことがない。今度機会があったら行ってみたいものだな」

アレンはそう言って窓の外に広がる景色を眺めながらも、袋に入っているもう一つのサンドウィッチに手を伸ばそうとしたとき、突然、大きな爆音と共に列車内で激しい揺れが起こった。

列車は爆音と共に停車したようである。

その時、激しい音を立て黒い布で顔を隠した数人の男が列車のドア

を薙ぎ倒し入ってきた。

ある男は乗っていた乗客に向けて銃を構え、またある男はナイフを乗客の首元に当てつけ動けなくさせている。

「おい、てめえら動くんじゃないぞ！動いたら……こうするぞ！」

リーダー格と思われる男は持っていたライフル銃の銃口を上に向けて一発放つ。

その銃声音に乗っていた乗客らは身震いをし、悲鳴を上げた。

「五月蠅い！黙ってる！」

男は上にもう一発銃を撃ち、乗客を静かにさせ、同時に持っていた黒い袋を持ち出した。

「ふん……。中々聞き分けのいい奴らじゃねえか。次、悲鳴を上げたら唯で済むと思うなよ？」

ニヤリと不気味な笑みを零し、近くにいた男の仲間を呼び寄せ集める。

「おい、乗客から金目のものを取って来い！」

了解したという面持ちで男の仲間数人が一斉に散らばった。

彼らは前方車両から周っていき、乗客の首に武器を突きつけ、金目の物を奪い去る。

空っぽだった黒い袋の中には次々と金の懐中時計や貴金属などが集められていった。

そして、男達はアレン達が座っている後方車両に向かって来ている。

「こちらに向かってきてますね。アレン……ってこの場に及んで何しているんですか」

男達に聞こえないようアレンの耳元で声を潜めて言うウィルだったが、アレンはさほど気にしてない様子で、外の景色を眺めながら黙々とサンドウィッチを食べ続けている。

「ん？なんか言ったか？」

彼は食べている口を動かし、向かい側に座っているウィルに視線を向けたが、今、彼が言ったことを全く聞いていなかったらしい。

「いえ、何でもありません……」

ウィルは額に手を当て、溜息をつきそう言おうとしたその時、

「おい、てめえら、金を出しな！」

男が武器をちらつかせ物品を要求してきた。

彼らは一番後ろに座っていたアレン達のところまで来たらしい。早く金品を手にして逃走したいのか二人に武器を突きつけ、急かした口調で言う。

ウィルは男達に逆らわないよう持っていた持ち物を男達に渡す。

しかし、アレンだけは恐ろしいくらい黙々とサンドウィッチを頬張っており男達の方すら見ていない。

「おい、さっさと出しやがれ！」

首元にナイフをちらつかせ、催促するがアレンはまるで聞こえていないかのように無視をしている。

「お前、死にたいのか？だったら望みどおりにしてやるよ！」

その姿に男は怒りの頂点に達したのか声を荒げてそう言つと、ナイフをアレンに向かって振り下ろした。

「調子扱っているのもいい加減にしろよ？」

ナイフが振り下ろされる寸前、アレンはサンドウィッチを銜えたまま、男のほうを見向きもせずに腕を掴み、動きを止めていた。

「なっ……！」

突然の出来事に男は動揺を隠せない。

なぜなら、彼はこちらを見向きもせずにナイフを止めたのだから。

「く、くそおおおおお！」

逆上した男はもう片方の手でアレンに殴りかかろうとするが、その寸前に彼はもう片方の手で男の鳩尾に殴りを入れた。

同時に男は意識を失い地に伏せる。

その様子を見てか、仲間の男達は乗客たちに武器を突きつけていたのをやめてアレンの方に視線を向けて武器を構える。

仲間の人数はざっと四、五人程度だろうか。

人数は少ないながらも武器は中々のものを備えている。

「さあ？武器を持ってないお前らに俺達に勝てるかな？」

挑発とも取れる男らの発言に対してアレンは食べていたサンドウィッチを机の上に置き、不敵な笑みを浮かべた。

「勝てる？笑わせんな。お前らなんか敵の数に入ってねえんだよ」

「何だと？てめえ、調子乗ってんじゃねえぞ！」

銃を持った男達はアレンに向かって数発の弾丸を撃ちこむが、まるでアレンは軌道を読んでいるかのように降り注ぐ銃弾を避けていく。幸いにも、この車両には他の客は乗って居ない為、流れ弾が当たることはないだろう。

「くっそ！何故当たらないんだ！」

苛々した様子で無我夢中で銃を撃ちつける男達。しかし、当のアレンはその様子を楽しむかのように男達の攻撃を避けていく。

「お前らと僕じゃ格が違いすぎるんだよ」

「！？」

その瞬間、アレンの姿は男達の前から消え去る。

そして、ある男が後ろを振り向いた瞬間、アレンの蹴りが男の腹に入り持っていた銃を手放し苦しそうな表情で地面に手をつく。

あまりにも自分達との格の違いに青ざめた表情で男達は唯呆然と見ているしかない。

「お前……。何者だ」

短刀を手を持った男は青ざめた様子でアレンを見つめてそう尋ねた。アレンは身を翻して男のほうを向くが目が笑っていない。

「誰？『冷酷のアレン』と言ったら分かるかな？」

「冷酷のアレン！？」

残っていた男達の仲間はさっきの青ざめた表情から一変、驚きの表情へと変わる。

「こいつ、ソルドの奴だったのか。だったら尚更だ……。皆、こいつをやっちまえ！」

未だ、青ざめた表情を浮かべながらも残っていた男らは武器を手にして、アレンへと一斉に襲い掛かってきた。

「ちっ……。汚い奴らだ」

舌打ちをし、コートを翻すと腰に付けてある近距離用の短刀を取り出し構える。

それと同時に短刀を持った男はアレンに切り付けかかろうとするが、彼はそれを流し後ろへと回り男に短刀の嶺の部分を勢い良く男の首元に入れる。

「っ！」

首元を強く打ち込まれた男は瞬時に意識を失い地に失せるが、同時に二人の男がアレンの背後に回りこちらへと向かってきていた。

（しまった！）

そう思ったときにはもう遅く挟み撃ち状態になり二人の攻撃はアレ
ンの方に直撃するかと思えたが、一向に二人の攻撃が彼に来ること
はない。

アレンは瞑った目を開けると、彼に襲い掛かるうとしていた男二人
は武器を手に持ったまま倒れていた。

「もう……アレンがやっていることを見てるところがちがひやひやし
てきますよ」

倒れている男たちの後ろを見ると、彼のパートナーのウィル・アー
ヴィンが銀髪を揺らし澄ました顔でこちらを見据えていた。

「……ウィル助かった」

起き上がり安堵の表情を浮かべ、そう言うアレン。

ウィルは男達の後ろに回り、彼が愛用している長剣の柄を使い男の
首元に殴りこんだようだ。

第五話

「パートナーである以上お互い助け合うのが当たり前ですから」

剣を腰に収め、微笑を浮かべて当然のことだとばかりにいうウィル。確かにそうだな、とアレンは軽く相槌を打ち、近距離用の短刀をコートの内側にある鞘に収めようとした時、突如、大きな音を立てドアが開いた。

どうやら先頭車両からリーダー格と思われる男がドアを蹴飛ばしアレン達がいる車両に入ってきたようだった。

「おい、お前らまだ集めてないのか……っ！」

男は最新型のライフル銃を持ったまま目の前に数人の仲間が倒れている様子を見て絶句してしまう。

「ああ、そうだったな。まだいたんだな」

アレンは面倒臭そうに再びコートを翻すと、ホルダーに入っている二丁拳銃を取り出して銃口を男のほうに向けた。ウィルもそれに倣い、腰につけてあった剣を構える。

「んな……！まさかこいつらをお前らが……！」

「だから？悪いのはお前らのほうだろう。いちいち面倒な質問するな。屑が」

「なんだと？なんならお前から先にあの世に送ってやるよ！」

男はそう叫ぶとライフル銃を構え、アレンに向かって打ち続ける。アレンとウィルは横に避けるが流れ弾の一つがアレンの横をすり抜け、彼の頬から一筋の血が流れ落ちた。

それでもアレンは気にも留めず、流れ弾を避けながら男の下へと一目散に走り出す。

そして、男が弾を入れ替える一瞬の隙を見てライフル銃を掴み、身を翻し男の後ろへと回り込んだ。

いきなりの出来事に男は驚きを隠せなかったが、素早く男は後ろに回りライフル銃を構えて撃とうとした。しかし、引き金を引いても一向に弾は撃ちだされない。

「何故だ！何故、弾が出ないんだ！」

男の表情に焦りの色が見え始める。

引き金を何回も引くが弾は出てこない。

そんな男の様子を冷たい目で見据えアレンは言葉を紡ぎ始めた。

「なあ、安全装置って知ってるか？」

「安全装置！？ま、まさかあの掴んだ時に！？」

「そう。銃なんて僕の得意分野だから。安全装置を有効にすると出る弾も出なくなるんだよ。銃を扱ったならそのぐらいの知識ぐらい持ってなきゃ」

「このガキ……！」

男は冷静さを失ったのか銃を手放し素手でアレンに襲い掛かろうとした。

その寸前にウィルが背後から男の首元に手刀を銜え、男は地面に倒

れる。

「ウィル、ナイス！」

「ほんと、なんで貴方と一緒に居たらいつもこんなにひやひやしな
きやらないんでしょう……」

額に手を当て溜息を付くウィル。

そんなウィルの姿を見てさっきの表情とは打って変わってアレンは
楽しそうに微笑んだ。

「まあまあ、スリルな人生もいいんじゃない？」

「いい訳ありませんよ！」

「お前はもうちょっと頭を柔軟にしたほうがいいぞ？」

「あのね……」

その時、外から人々の声が聞こえ始めた。

窓の外から野次馬もちらほら見えるがその間を潜り抜け青いコート
に身を包んだ人々がやって来ており、どうやら誰かの通報で、フィ
オナの警備隊がこちらに向かって来たらしい。

「そう言っている間に、警備隊が来たようだな……。こいつらの身
柄引き渡し手伝ってくれ」

「……分かりましたよ」

ウィルは何処か不服そうな表情を浮かべて、アレンと共に野盗達を

後から来た警備隊に引き渡す作業を始めたのだった。

第六話

「あーあ。これじゃ、お昼過ぎには到着できないな……」

「仕方ありませんよ。復旧するまで待つしかないですね」

野盗達をフィオナの警備隊に引き渡した後、今度は現場検証と列車の復旧作業が始まっていた。作業は数時間掛かるらしく二人は此処で足止めを食らうしかなかったのだ。

おまけにこの町は列車以外の公共交通手段は無く、車で移動しようにもアレン達の手元には車が無い。

本部に要請して車を調達出来ればいいのだが、此処からヴィオラまで車で行くとなると列車より時間がかかってしまい下手をしたら日が暮れてしまう。

いやがおうにもこうして復旧を待つしかないのだ。

二人揃って溜息を付いていると事件があった列車付近から甲高い声が聞こえてきた。

「ちよつと！状況報告遅いじゃないのよ！」

警備隊のシンボルである羽の付いた淵の広い帽子を被り、赤目・赤髪が良く目立ち遠くにいても気が付きそうな少女の声。

腕についている警備隊特有の星の階級の印からして恐らく警備隊の指揮官に値する人物なのだろう。

少女の声を聞き、部下と思われる男は苦笑いを浮かべ少女の元へと駆けつけてきた。

「で？状況は？」

苛ついているのか少女の声音は低く、腕を組んで忙しく指を動かしている。

そんな少女を宥めるように部下の男は今分かっている情報を簡潔に少女に伝えた。

「一部の車両が爆破によって損害を受けていますが、乗客は全て無事です」

「ふん、たく……。最近の野盗も過激になってきてるわね。他の情報は？」

「いえ、まだ事情聴取や取調べをしていて……」

「まだ、済んでないの！？あれから一時間ちよつと経ってるでしょうが！」

もうしょうがないわね、と少女は顎に手を当て爆破によってぼろぼろになった車両を見つめた。

爆発の威力はあまり強くなかったんだろうが、所々大破してしまっているところがある。

これだけ所々車両が大破していれば修理する金額も計り知れない。もしかしたら列車を買ったほうが安く付く場合もあるだろう。

少女は薙ぎ倒しになったドアを跨いで車内に入った。

床や壁、列車の座席などには銃で撃たれた形跡が残っている。

「よくまあ、これだけドンパチやって誰一人怪我しなかったものね」

「そりゃ、そうだろうな。後ろの車両は僕達しか乗ってなかったし」

「そうね、それが不幸中の幸いって所かし……っ!？」

少女は後ろにいた人物に驚き即座に振り向いた。

死神と思わせるような黒いコートに包まれたソルドの組織服を着込んでいる青年が二人。

そのうちの黒髪の少年に少女は見覚えがある素振りを見せた。

「あーっ! あんたは!」

「やっぱりそうだったか……」

少女の方は嬉しそうに黒髪の青年 アレンを見つめる。

しかし、当のアレンの方は頭を抱え何処か鬱陶しそうに彼女を見つめていた。

第七話

「この方とはお知り合いなんですか？アレン」

突然の出来事にウィルは口をあんぐりさせており、上手く状況が飲み込めていないらしい。

アレンは嫌そうな表情を浮かべると、目の前にいる少女について説明し始めた。

「ああ、こいつはノエル・イザベラ。まあ、何だ？腐れ縁って奴だな」

吐き捨てるように言うアレンに対して少女　ノエルは気に入らなかつたらしく頬を膨らませ、アレンの背中を少し強く叩いた。まるで鞭を打ったかのように威勢のいい音が辺りに響き渡る。

何が起こったのかと驚き、作業をしていた隊員達はこちらに視線を向けた。

「痛ッ！何するんだお前！」

そんな様子に気づくはずもなくアレンは小さく悲鳴を上げ叩かれた背中を手で擦り、ノエルを睨みつけた。

余程、強く叩かれたのか少し涙目になっている。

そんな彼をノエルはちらりと横目で見やり右手を頭で抱え、はあ…と溜息を付くと、何処か呆れた口調で言葉を続けた。

「もう……違うでしょう！私とアレンは幼馴染なのに……。どうしてそんなに素直になれない訳！　ところで、隣にいる銀髪的美青年の方は？」

ノエルはさっきの膨れっ面の表情から一変、嬉しそうな表情を浮かべ、未だ背中 of 痛みに唸っているアレンの横腹に右肘を突きながらそう尋ねた。

未だに彼は、お前手加減とか知らないのかよ……とぼやきつつも隣に居るウィルを見据えて簡単に紹介をし始めた。

「ウィル・アーヴィン。僕のパートナーだよ」

そう言われ、ウィルは軽くノエルの方を見据え軽く会釈をし、

「ウィル・アーヴィンです。どうぞよろしく」

と長い銀髪を揺らしノエルに向かって微笑を浮かべた。

彼女もそれに倣い、警備隊のシンボルである羽の付いた帽子を取り外し笑顔を浮かべ軽く会釈をする。

「そうなんですか！ いやあ、かつこいいですね……。本当、誰かさんと大違いで」

「何だと？」

ノエルは帽子を持ったまま少し意地悪な笑みを浮かべて、アレンを見やったことに気が付いたのか、未だ背中を擦りながらも彼は彼女をまた睨みつけた。

「まあまあ、お二人さん……」

これ以上不穏な空気にさせないためにも間にウィルが割って入り二人を宥める。ノエルとアレンは未だ不満そうな表情を浮かべながら

も彼の言葉に従うのだった。

「……と言っわけなんだが」

今回のアレシアの事に関しての簡単な説明を終えた後、ノエルは持っていた羽根が付いた帽子を弄びながらアレンの説明を軽く聞き流していたようだった。

あまりにもその態度が聞いているようには思えなかった為、アレンは訝しげな表情を浮かべノエルの方を向いて尋ねる。

「お前、本当に聞いてたのか？」

「聞いてたわよ、ちゃんと。要はあんたがドンパチやらかして列車が使えなくなつてアレシア方面へ行くのが難しくなつたってことでしょ？」

「あ、ああ。まあ、そう言うことだな」

アレンは頭の四隅の何処かで言葉に引つ掛かりを覚えながらも頷き帰す。

彼女は情報を統括するのが職業なだけであつて要点要所の所だけは掴めているらしい。

その時、何か閃いたのか彼女の口からとんでもない言葉が発せられた。

「じゃあ……、私の警備隊の車使えば？」

「は？」

一瞬、アレンとウィルは顔を見合わせ驚いた表情を浮かべその場に立ち尽くした。

アレンはあのなあ……とこめかみをビクつかせ右手を頭に当てながらも言葉を続ける。

「僕達が警備隊の車を勝手に乗り回せると思う？ 第一、他の組織から何か借りる時にはこっちの上の幹部からの許可が必要で……」

「だから、警備隊の中で一番偉い私がいいって言ってるじゃない。あんたの組織のお偉いさんには私が話を付けとくから。それでいいでしょ？」

あまりにもノエルの言葉があっけらかんとし過ぎていて二人は黙ってしまふ。

第八話

最初に沈黙を破ったのはウィルだった。

彼は少し考えた様子でアレンを見て言葉を紡ぎ始める。

「アレン、此処はお言葉に甘えましょうよ？復旧までいつまで掛かるか分からないですし……」

ウィルの賛成にノエルは嬉しそうな表情を浮かべて彼の腰に肘を突いた。

「あら、銀髪のお兄さんもいいこというじゃない。そうよー。折角私がアレンの為にと思って言ってるのにー」

ノエルの言い方にアレンは内心少しムツとなるが、確かにウィルの言うとおり復旧までにいつまで掛かるか分からないのだ。

此処でじつとしていたらアレシアに着くのが遅くなってしまうだろう。

「はぁ……。お前に借りを作るのは嫌だったんだが。状況が状況だしな。頼むよ」

「本当！？じゃあちよつと待っててね！」

まだアレンは何処となく嫌そうな顔を浮かべていたが、ノエルは嬉しそうな表情を浮かべ、すぐさま部下を呼び出し何が何でも直ぐに車を手配するように、と命令したのだった。

数分後。

三人は駅のホームを抜け駅前広場へとやってきた。

彼女の命令通り、広場の前の道路には「フィオナ第一警備隊」と書かれた一台の青い車が止まっている。

「本当にありがとうございます。助かりますよ」

「ううん。車一台貸し出すくらい大丈夫よ。ウィルさん。さ、二人とも乗って乗って。本当は私が運転してあげればいいんだけど、此処の事後処理やらなきゃならないから……」

心の底から本当に申し訳ないと思っているのだろうか、彼女の表情は先ほどとは違い少し沈んで見える。

「ったく……色々大変だろうけれど、無理せず頑張れよ。ノエル」

そんな様子を見兼ねてアレンは後ろを向いたまま彼女に聞こえるか聞こえないぐらいかの声でぼそりと呟いた。

「えっ……？うん……。分かってるよ」

まさかアレンからそんな事を言われると思ってなかったのだろう。ノエルは頬を少し赤らめ俯いたままそう答えた。

そんな二人の様子をウィルは微笑ましく見つめながらも先に車に乗り込む。

実は彼なりの気遣いだったのがアレンは先に置いていかれると思って勘違いをし慌ててウィルの後に続き、車に乗り込んでしまった。折角のチャンスだったのに、とウィルは思いつつも乗ってきたアレンのために右に寄り席を空けドアを閉めた。

二人が乗ったのを運転手は確認した後、エンジンを掛け車を動かし

始める。

そして彼らは車の窓を開け、ノエルの姿が見えなくなるまで手を振り続けたのだった。

第九話

工業的な風景は豊かな田園風景へと変わって行き、再び発展した都市部へと変わっていく。

そして車に揺られて数時間後、アレン達は目的地のアレシアの駅前通りに着いた。

二人は車から降りて運転していたノエルの部下に軽く頭を下げる。手を振り彼らの車が見えなくなった頃、アレンは一呼吸し周りの街の風景を見渡した。

「此処が、アレシアか」

この国の最大の都市「アレシア」

最大都市とあってか辺りにはたくさんのビルや店が立ち並んでいた。時刻は既に夜を迎えようとしているが依然として人通りは多く、中核都市・ヴィオラとは一風違った雰囲気醸し出している。

「さて、こんな時刻になったが……。とりあえず行くか」

「そうですね。地図によれば、此処から近いみたいですよ」

二人は持ってきた資料を持ち大通りを抜けていった。

アレン達の服装をあまり見たことが無いのか、通り過ぎる人たちはこちらを見ているが彼らは気にする素振りもなくそのまま歩き進めていく。

「……此処だよな？」

「……みたいですね」

駅前の大通りを抜けると人はまばらにしか居ないがそれでも建物は非常に多い。

いくつかの建物に囲まれて居るその中にミーティア本部が建てられていた。

本部の建物は彼らの想像以上大きく、一体、何階まであるのかと言うほどの大きな高層ビルに近代的なデザインが施された大きな扉が建物の威圧感を出しており、その扉の前には数十人の警備員と思われる人々がこちらを見据えているのだ。

「流石、この国の中枢を図ってる組織は違うよな」

「そう……ですね。こうしてても仕方ないので入りましょうか」

「ああ。つたく、こんなに無駄にでかい建物作ってどうするんだって話だよな……」

アレン達はそんな小言を言いながらも一人の警備員に近づいていき、ソルドの者だが、と話し始めた。

既に警備員には話は伝わっているらしく、二人はソルドの身分証明書を彼らに見せた後、閉ざされていた扉を開け中に入っていた。

第十話

建物内に入り受付へ行くと、白いローブを着た二人が彼らを出迎えた。

今回の事情を軽く説明をした後、アレン達は近くにあったエレベーターに乗り込む。

電光板の階数は徐々に増えて行き、やがて最上階の三十階を示したと同時にエレベーターのドアが開いた。

彼らはエレベーターを降りて少し歩くと、細かいデザインが施された茶色いドアが二人の目の前に現れた。

一人の白いローブを着た女性は威圧感のある扉を軽く数回ノックし、失礼します、と声を掛けると同時にドアノブを回し扉を開ける。

「所長、ソルドの方をお連れしてきました」

所長と呼ばれた男はデスクで作業をしていた手を止め、こちらを振り二人に対して笑顔で出迎えた。

この国では珍しい薄い桔梗色の髪・黒い瞳が特徴的で何処か温和な雰囲気を持っているようだ。

彼は二人を席に勧めた後、自らも向かい側に腰を下ろした。

では失礼します、と彼らを此処まで連れてきた二人のミーティアの職員は軽く頭を下げ、静かにドアを閉める。

ドアが完全に閉まったのを見届けると、男は軽く咳払いをし、柔らかい口調で言葉を紡ぎ始めた。

「無理を言って済まなかったね。私はフェリクス・ウィルヘイム。ミーティア幹部の一人だ」

何故、ミーティアの幹部に呼ばれたのかアレン達は内心、驚いたが表情には出さない。

アレン達もフェリクスに簡単な自己紹介を済ませた後、今回の本題である呼ばれた理由について聞くとフェリクスは温和な表情から一変、何処か厳しい表情で二人に話し始めた。

「実は、今、アレシアではミーティアの職員が襲撃される事件が多発しているのだ。

まだ幸いにも死者は出ていないが、今後どうなるか分からない。それに実力者が多数負傷していることもあってこちらとしても人手が足りず困っているのだ。その時に丁度、ソルドに勤めてる親友のアドルフが連絡をくれてな。有力な実力者は居ないかと聞いたら、アレン君とウィル君の名前が上がってきたという訳だ。本来なら他の組織に手を貸してもらうのはご法度に近いことなんだが……。いかんせん、このままいくとこの国の政治や治安にも影響が始めかねない。それで今回の場合は上からの許可が下りたわけなんだ」

なるほど、と彼らは頷いた。

今回は有数な実力者がかなりの危険な状態まで襲撃されるということもあってアドルフは浮かない表情をしていたのだろう。

状況を話せばいくら上司の命令とも言えど絶対服従組織ではないため、自分の身を案じて断られる可能性も出てくる。

一呼吸置いた後、フェリクスは二人を見据えて再び言葉を紡ぎ始める。

「今回はこのような仕事な訳なんだが……。引き受けてくれるか？」

「いいですよ。僕達はそのような仕事に慣れてますから。それに折角此処まで来て帰るのも勿体無いですし」

「私も構いませんよ。アレンの意思に従うのみなので」

断られるかどうかかなり心配だったんだろう。

フェリクスは、協力者として既に色々な支部に頼んだけれどいい返事が出なくて、これも断られたらどうしようかと思った、と言って苦笑いし、安堵の表情を浮かべほっと胸を撫で下ろした。

第十一話

「ではこれから詳しい仕事内容について説明するんだが……」

フェリクスがアレン達のためにデスクから数枚、資料を取り出して
いると突然、閉まっていたドアが荒く開いた。

何事かと思ひ三人はドアが開いた方へと視線を向ける。

そこにいたのはさっきアレン達が案内をして貰った一人の女性職員
で、彼女の表情は焦りと混乱に満ちている。

「どうかしたのか？」

フェリクスは彼女の表情を見てただ事ではないと悟ったんだろう。
女性は軽く息を整えるとフェリクスの方を見て手短かに話し始めた。

「午後十時頃、第四地区と第七地区で謎の人物達による襲撃があつ
たと警備隊からの連絡が……。とりあえず、警備隊の一部と本部に
いる実力者を現場に派遣しました。ですが、余談は許さない状況で
……」

「ふむ、そうか……。すまないがアレン君、ウィル君。詳しい仕事
内容はまだ話してないが、現場に行つて来て欲しい。君達は腕が立
つとアドルフから聞いている。アレン君は第四地区、ウィル君は第
七地区に行つてくれないか？」

「分かりました。ウィル行くぞ」

アレン達は立ち上がりコートを翻し、フェリクスからそれぞれ渡さ
れた地図を持って部屋を出て行つたのだった。

「今回は別行動だが……、どんな奴がいるか分からない。気をつけるよ」

「そうですね……お互いに無事に帰ってこれるように健闘を祈ります」

くれぐれも無茶はしないで下さいよ、とウィルは言葉を付け足してアレンとは反対方向の道へと進み始めた。

アレンもまた第四地区に向かうため、地図を見比べながら早足で進めていく。

第四地区は第一区間に当たるブロード地区とは違い、明かりも少なく辺りは寂れた倉庫や道が入り組んでいるだけであり真っ暗な暗闇の中では不気味さが増してくるよう感じる。

「恐らくこの辺のはず……」

入り組んだ路地に足を進めているとふと地面の感触が気になった。さつきまでは無かった感触だったからである。

雨が降っている訳でもないのに地面は濡れており、触ってみると少し粘り気がある。

アレンのように数々の実戦経験者であればその液体が何を示しているのか直ぐに見当がついた。

「もしかして……。これは血痕……！」

何らかの動物の血痕である可能性も否めない。しかし、今は場合が場合である。

何者かがこの場所で誰かを傷付けられた可能性の方が大きいだろう。すぐさまアレンは駆け出し、地面に落ちている血痕の跡を追っていく。

暫くしてついた場所は少し広い路地裏だった。

この場所についていた電灯は切れてしまったのか明かりはなく闇に包まれている。

アレンは腰に収めている携帯用の電灯を取り出し明かりを付けた。

「なっ……！」

光に照らされた路地裏に広がる光景はあまりにも異様だった。

ミーティアの人々が着ていた白いローブは、真っ赤に染まり数十人全てが地面に倒れていたからだ。

そしてその奥で右耳に十字架のピアスをした灰色の髪をした男が優雅にこちらを見ていたのである。

第十二話

「やつとお仲間さんの登場か。あーあ、ずっと待たされて退屈してたんだぜ？」

背筋が凍るぐらいに不気味な笑みを浮かべながら男は一步步アレンに近づいてきた。

彼はその様子に怯むことなく男を睨みつけながら、愛用の二丁拳銃を取り出し、銃口を突きつける。

「お前がやったのか？ともかく、このままお前を逃がすわけにはいかないんでね」

「逃がす訳には行かない？その言葉そのままそっくり返してやるぜ？」

男の口元が歪んだ瞬間。

彼は素早い動作で、着込んでいた黒コートの中から数本の投げナイフを手に取りアレンの方に投げつけた。アレンは横に飛び、ナイフを避けて男の方に弾丸を撃ち込んだ。

その途中に後ろの方にあつた箱がナイフによつて壊され、当のアレンは気にせず横に飛んでいくが、男はまるで銃を向けられているとは思えないほどの動きで軽々と銃弾の雨を避けていく。

やがて撃ち続けていたアレンの弾は切れ、常時装備してある代えの弾丸を手馴れた手つきで直ぐに変える。

銃を向けたままアレンは冷たい目で見据えるが、その様子に男は怯む様子も無い。

「中々いい腕前をしているな。だが……。俺に当たったことが運の尽きだったな」

「何だと……？　っ！」

恐らくほんの一瞬の出来事だっただろう。

男がそう言った瞬間、アレンの両腕に激痛が走り、思わず銃を落としそうになるが何とか力を入れて持ち直した。

自分の腕を見てみると両腕からは血が流れ、大きな切り傷が数本ついている。

そのナイフは男の方へと向かい、彼の手には血のついたナイフが数本握られていた。

「なっ……！まさか！？ナイフが戻ってきた！？」

ありえない、とアレンは腕から流れている血を押えながらそう呟いた。

一度投げたナイフが投げた本人の意思で戻すことは物理的に不可能だ。

驚いているアレンをよそに男は次々とナイフを投げていく。

アレンは投げられてくるナイフをかわすが避けたうちの一本が右腕に突き刺さった。

突き刺さる激しい痛みになんとか堪えて構えるが、上手く右腕が上がらず弾丸を放つことが出来ない。

余り深い傷を負っていない左腕で銃を撃ち続けるが、さっきよりもはるかに命中度は落ちている。

「どうした？さっきより動きが鈍くなってるぜ？ま、そのぐらいの傷を負って放置してたら最悪死ぬかもなあ」

手元のナイフを空中で弄び、何処か楽しそうな表情を浮かべた男の言葉にアレンの表情には焦りが見え始める。このまま戦ってはまともには勝てないだろう。

肩で息をしているアレンに、先ほど破壊された木箱が目に入った。中身は既に零れており、黒い粉が地面に散らばっていた。

（確かあの箱は……。これなら……いける！）

アレンは自分の銃と服を見比べ、敵に背を向け走り始めた。

予想外の行動だったのか男は少し驚きの表情を見せながらも、直ぐに歪んだ表情を戻しナイフを投げつける。

「やられすぎて気が狂っちゃったのか？逃げようたって無駄だぜ？」

男の容赦ないナイフの雨が降り注ぐがアレンは敵に背を向け、ひたすら来た道を走り続ける。

アレンはある程度距離が離れた所で持っていた二丁拳銃をすぐさま取り出し、箱の方へと打ち込んだ。

彼が打った弾は男をすり抜け箱に当たり、直ぐに火花を散らしてとてつもない爆音が周りに響き渡った。

その衝撃でアレンは身を崩すが何とか体勢を整える。

やがて爆風が収まり視界が良くなって、アレンが周りを見渡すと一人の男が地面にうずくまっていた。

さっきまで余裕の表情を浮かべていた男は苦しそうに胸を押さえて荒い息遣いをしている。

「どうだ？さっきまでなぶり殺していた相手に殺されそうになった気分は」

アレンは右腕の痛みには耐えながら、数歩歩いて男に近づいて見下ろし拳銃を突きつける。その目には何も感情が宿っていない。

「この俺が、お前に負けてるとでも言いたいのか？」

「そうだ。お前は油断しすぎなんだ。あの中には火薬が入っててね。僕を殺そうとするのに夢中になってたお前は気が付かなかったみたいだな。とりあえずお前はこちらのソルドの権限に置いて身柄を拘束させてもらおうか」

アレンは拳銃を突きつけたまま男が持っていたナイフを全て奪い取る。

しかし、男はその様子にただひたすら笑うだけで、その様子はあまりにも不気味だ。

「何がおかしい」

「いや……これ以上おかしいことはないだろうねー。お前は詰めが甘すぎるんだよ」

「っー」

その瞬間、路地に何らかの煙が充満し始めた。白い濃い煙でアレンの視界が薄れていく。

しまった、と彼が思う間にはもう遅く、充満していた白い霧が晴れた後、男は姿を消していた。

「くそ……みすみす敵を逃しちまったって訳か……」

アレンは悔しそうな表情を浮かべながらさっきまで男がいた場所をただ呆然と見ているしかなかった。

第十三話

「あら、もうこんなところまで来ちゃったのねー」

満月の夜。

雲ひとつない夜空に、女の新髪がゆらりと風に靡いた。

肌が白くとても綺麗な顔立ちに対して、彼女の表情は狂気に満ちており戦いに慣れない一般人が見たらその雰囲気には圧倒されるだろう。此処はアレンがいるブロード地区とは真反対に位置するシルビア地区。

周りを照らしているのは月の光だけという暗い路地の真ん中に女が不敵な笑みを浮かべ、退屈そうにウィルを見つめているところだった。

ウィルは薄明かりに照らされた女の顔を見て表情が一変する。

「貴女は、あの時の」

「ああ、何処かで見たと思ったたらあの時の少年だったのね。殺しそこねて行方を捜してただけで見つからなかった。でも、まさかこんなところで会えるとはね」

何処か憂いに満ちている女の顔を見てウィルは奥歯を噛み締めた。

あの時、彼は女の行方をしらみつぶしに捜してたからだ。

「貴女の顔は一度たりとも忘れたことはありませんよ。十五年
前のあの日からね」

「十五年前のあの日……ねえ。あの時の貴方はとても歪んだ表情を浮かべていてもつとなぶり殺しに」

「黙れ！」

いつもの彼らしくない言葉を女に言い放って睨みつけ、ウィルは咄嗟に腰にかけてあった二本の剣を手に取り女に向かって走り始めた。やれやれといった表情で女も背中挿してある大剣を取り出し彼と刃を交じり合わせる。

「生憎、私はそんなに暇じゃないのよねー。貴方の相手なんかしてられないわ」

そう言っただけで彼女は横一文字に剣を振り彼の二本の剣を薙ぎ払う。女の力といえども大剣の影響でかなりの力が加わっているためウィルは体勢を崩すが、直ぐに立ち直し構えた。もう一度、彼は女の方へ真正面へ向かって走り出す。

「真正面から来るなんて……。芸がないわよ」

彼女はそんな軽口を叩きながらウィルの攻撃を避けようとした。だが、ウィルは後一步で彼女に近づこうとした瞬間、彼の姿が高速移動したように一瞬消えてしまった。

女が一瞬戸惑い、ウィルの攻撃に気が付いて上を見上げたときには彼の剣が女の腹を掠めていた。

咄嗟に急所を外したらしく、多少痛みにも表情を崩しながらも大剣を地面に突き刺し体を起こした。

「風の噂で剣流が得意だとは聞いてたけど……中々やるじゃない。ちよつと私も貴方のことを甘く見てたわ。でも……、これなら私の方が上よ」

「っ!？」

突如、彼女の姿が一瞬消えた。

無論、実際には消えてはいない。彼女の姿を目が追いつかずにそう見えるだけだ。

突如、ただならぬ寒気を感じ彼は後ろに飛んだが、避け切れなかったらしく彼の左頬に一筋の血が流れ落ちる。

「あら、これを避けるなんて……。貴方が初めてだわ。私を本気にさせた以上　責任はちゃんと取りなさいよ？」

殺気と狂気を含んだ冷たい笑いを浮かべ女はウィルに向かって大剣を振り回す。

ウィルは彼女の攻撃を避ける事に必死だった。

確かに彼の剣術は一流の腕前だ。

しかし、目の前にいる彼女の剣術は彼以上の実力を持っている。

特に反撃・攻撃のスピードに関しては女の方が上だろう。

彼が二つの剣で攻撃しようとしても、女はまるで彼の攻撃を読んでるかのように大剣を使い隙ができた部分を狙ってくる。

しかも、急所ばかりは狙わず、まるで蛇をなぶり殺しにするかのようにはじわじわと痛めつけていくのだ。

数分の間は彼女の攻撃を流すか避けるかしていた彼も結構な時間が経つにつれて、避ける範囲に限界が出てきたのだらう。

彼が着ていた黒の組織服は段々と切り刻まれていき、所々血がにじみ出ていた。

「そうそう……もつと私を楽しませてね？」

容赦ない彼女の攻撃。

一瞬、ウィルの足元が纏れてしまったのを彼女は逃さなかった。
彼の左手に激痛が走る。

「っ……」

何とか気絶しそうなのを堪え、氣力を振り絞りながら残った右手で剣を構えるウィル。

だが、片手だけではさっきよりも防げる場面は少なく自身の氣力と体力を持ちこたえるのに精一杯だった。

彼女と刃を重ねてどのぐらい時間が経ったのだろうか。

既にウィルのコートはボロボロになっており、辺りは彼の血でまみれていた。

これだけの傷を負っていたら何時倒れてもおかしくないだろう。

女も、中々上手いかならないことにじれったさを感じたのか大剣を片手で構えて彼に向かってこう言い放つ。

「もうそろそろ終わりにしましょ？」

その掛け声と同時に女は持っていた大剣をいきなりこちらに振り回した。

体の痛みと戦いの中での焦燥感に駆られながらもウィルは右に飛ぶ。彼女はその一瞬の時を待っていたのだらう。

辺りに数発の銃声が響き渡った。

「うつ……ぐっ……」

ウィルは痛みには耐え切れずに持っていた剣を地面に落とし、倒れ込んだ。

黒いコートで分かりづらいが銃弾は彼の右腕と肩を貫通してしまっ

ている。

「私が銃を使えないとも思った？」

女は多少、疲労の色を見せながらも不気味に笑っていた。

そして、限界を迎えた彼の元へと歩み進めて持っていた拳銃を彼のこめかみに押さえつける。

「こんなに私と対等に戦えたのは貴方が初めてよ。……でも、残念だったわね。貴方は所詮その程度。私には勝てないのよ。そうね、此処まで戦えた貴方にご褒美。何か言い残すことはあるかしら？」

「言い残すこと……ですか。貴女なんか言うぐらいならそのまま死ぬほうがマシですよ。まあ、もっとも私はむざむざ死ぬつもりはないですしね」

「あら、此処まできても偉く強気ね。……言いたいことはそれだけ？それなら話、聞かないほうが良かったわ。無駄話は此処でお願いします。あの世で父親に会って楽しんできなさいよ」

女はウィルに対してそう吐き捨てて、言葉を切った後、彼に向けて引き金を引こうとした。

その彼女の姿を最期にウィルは目を閉じ、辺りに数発の銃声が響き渡った。

第十四話

？

自分は撃たれたはずだ。何故まだ生きているのだろうか。

意識はまだあるし頭を撃たれた痕跡もない。

不思議に思い目を開けてみると彼に銃口を向けていた女が右手を押さえて肩で息をしていた。

撃たれたのはウィルではなく女の方だったのだ。

「うつ……あ……」

咄嗟の出来事に女は理解できずに右手に持っていた銃を手放してしまふ。

そして彼女が後ろを振り返るとそこにはウィルと同じ黒いコートに身を包んだ男が冷たい目で敵を見下ろし拳銃を構えていた。

右腕の傷が痛むのか肩で息をしつつも、月明かりに黒髪を靡かせ燃え上がるような真紅の瞳を見据えてコートを翻し、冷たい眼差しでこちらを睨み付ける。

その人物の事をウィルは良く知っていた。

「アレン！」

アレンは辛そうに息をしている彼の方に目配せをすると直ぐに女の方に視線を戻した。

そして、躊躇なく、彼女に向かって数発弾丸を撃ち込むが、対する女は物ともせず大剣を振りかざし弾き返す。

「ちっ……厄介だな」

アレンはそう言うと、銃を後ろに納め、左手で腰につけてある短剣を数本取り出して女に投げつける。

当然のことながら女は大きく横に避けて大剣を使い叩き落とすが、それこそが彼の狙いだった。

女が投げられてきた短剣の方に意識が向いている一瞬の隙に、アレンの腰に収められている銀色と黒色の入り混じったの長剣を取り出し一気に詰め寄る。

彼の攻撃は利き手より精度が落ちるらしく、女の足元を軽く掠めただけで決定的な致命傷には至らない。それでも不意の攻撃は効いたのか、彼女の動きが若干鈍くなったように思える。

「ふっ……、あんたのお仲間も中々やるじゃない。もっとお相手してあげたいけど……」。

さすがに今回は二対一じゃ、分が悪すぎたわね。また今度、相手してあげるわ」

アレンが声を掛け、女の下へ寄ろうとしたとき辺りに白い煙が充満し始めた。

そして、霧が晴れてアレン達の視界が良くなった頃……。地面に若干の血液痕を残したまま、女の姿は消えていた。

アレンは彼女を追おうとしたが、先ほどの戦いで体力がかなり消耗し上手く体に力が入らない。

それにウィルの事もあり、追撃するのを諦めた。

アレンは持っていた携帯電話で現在位置と逃走者の追撃、けが人がいるので緊急に救急隊を呼ぶよう仲間に伝えると、全身血まみれになっているウィルの元へと駆け寄った。

「大丈夫か！？おい、しっかりしろ！」

彼の体からは大量に血液が流れており、一刻も争う状況までに悪化して息遣いも荒い。

アレンは着ていたコートを脱いで生地の一部を歯で引きちぎり、右手の痛みを堪えながらも血が流れ出ている所を縛り止血していく。

「すみません……。私はアレンの補佐なのに守ることさえ……」

「今回は相手が異常すぎた。ただそれだけの事だ」

「でも……」

「今はそれ以上何も言っな！」

あまりの剣幕に何か眩こうとしたウィルは黙ってしまふ。

数分後、路地近くからサイレンの音が鳴り響いてくる。

そして救急隊が到着した後、すぐさま彼らは近く的大型病院へと搬送されていった。

第十五話

「？」

ベットの中に入り、夢の世界へと落ちようとしていた幼い少年の耳に聞こえてきたのは微かな物音。

枕元に置いてある時計の時刻を見ると既に午前零時を回っていた。

「お父さん？」

この家には母親や他の兄弟は居ない。

母親は既に帰らぬ人となっており、彼以外に兄弟も存在しないからだ。

彼は部屋を出て、一階に降り物音がするリビングの方へ向かって歩いていきそつと足を進めて階段を降りていく。

だが、不思議なことに辺りの部屋の電気すら一つも付いていない。

（やつぱり、気のせいだったのかな……）

お気に入りであるくまのぬいぐるみを胸に抱きかかえたまま彼はそう考える

もう一度、上へ上がろうとしたその時、更に大きな物音がリビングの方から聞こえてきた。

誰だろう、と思いつつドアをそつと開け周りを見渡す。

明かりは付いておらず漆黒の闇が部屋一面を支配している中、手探りで部屋の電気のスイッチを探し出し電気を付けた。

だが、その瞬間思いもよらぬ光景が少年の目に映った。

一人の男性が血の海の中に横たわっているのである。

少年は驚きと恐怖に襲われながらも、倒れている男性に向かって走り出し近づく。

「お父さん！ねえ、お父さんってば！」

いくら少年が呼びかけても彼の父親と思われる人物は全く反応を示さない。

少年の目からは涙が溢れ、彼の衣服に雫が落ちていく。

「あら……。こいつ、子供まで居たのね……」

部屋の中に響き渡る、女のハスキーボイスの声。

少年はおそるおそる振り返る。

そこには全身真っ黒の服に包まれ、サングラスをかけた長身の女が立っていた。

唇には赤い口紅を塗っており、何処か妖艶な感じを醸し出している。スタイルもかなり良く、恐らくサングラスを外したらかなりの美人の分類に入る人ではないだろうか。

ただ、彼女の手には拳銃が握られており普通の人間ではないことは少年でも理解は出来た。

「あつ……あつ……」

恐怖のあまり、少年は叫び声も上げれずただ呻き声を漏らすだけだ。そんな少年を見て女はフツと笑みを零し銃口を向けた。

「大丈夫よ。直ぐに貴方のパパの下へと逝かせてあげるから」

女は少年へ近づいていくが、少年は恐怖心に襲われながらも一歩ずつ後ろへと下がっていく。

そして少年が後ろの壁にぶち当たったとき、女は何処か楽しそうな表情で彼のこめかみに銃口を当てた。

「さあ、もう逃げられないわよ。ほら、最後まで笑い笑ってよ。今から貴方のお父さんにあつちで会えるんだから」

女は躊躇せず……、むしろ何処か嬉しそうに少年に向かって拳銃の引き金を引こうとした。

「っ……」

何か嫌な事を思い出したかのように、ウィルの顔は不快な表情へと変わっていく。

周りは白い壁に覆われ、所々消毒薬の匂いが鼻につくことから、どうやらアレシアでもかなり大きい病院に搬送されらしい。

時刻は既に夜中を回っているようだが、依然として近くの部屋では物音が聞こえてくる。

謎の人物達による襲撃事件があつたからだろう。

救急的な処置が必要な患者が運ばれているのかも知れない。

彼は体を起こそうとするが麻酔によってか上手く体を動かすことが出来ない。

周りには多数の機械が設置してあることから余程、酷い傷を負っていたのかもしれない。

仕方なくウィルは起き上がるのを諦め、ふと横を見てみると……。

「アレン……」

椅子に寄りかかって寝ているアレンの姿が目映った。恐らく自分が寝ている間はずっと見ていたのだろうが、今は疲れて熟睡してしまっている。

また、彼の体にも所々包帯が巻かれていることから、ウィルには及ばずともかなりの負傷をしていたのだろう。

そんな状況にも関わらず、アレンは痛みをこらえ看病していたのだろうか、と思うと自然と申し訳なさを感じてしまう。

さて、どうしようか迷っていると、ん……と眠そうに軽く欠伸をして、アレンが目を覚ました。

「ウィル起きたのか……。具合はどうだ？」

「麻酔が効いてるのか分かりませんが痛みはだいぶ少なくなってます。アレンこそ無理しないでちゃんと寝てください」

「僕はかすり傷が増えた程度で済んだからね。大丈夫だ。もう夜中か……。依然としてまだ終わってないんだな」

部屋の外から聞こえる物音や看護婦の声に耳を傾けながらアレンはそう呟いた。

そして、自己嫌悪気味に表情を曇らせる。

「僕達の仕事は、いくら過激派であっても、表向きの仕事はこの国で暮らしてる人々を守る事だ。いくら非常事態だったとはいえ……、人々を守れず、敵を捕まえずにのうのうと帰ってきた自分に凄く腹が立つよ」

ウィルはどう言っているのか分からなかった。

確かに彼の言うとおり自分達は敵を追うことはしなかった。
いや、追う事が出来なかった。

自分達には実力があると信じていたのに、だ。

それを簡単に打ち砕かれてしまった。

これほどまでに無力さを痛感したのは初めてかもしれない。

少し考えて、でも……とウィルはアレンの燃え上がるような真紅の瞳を見つめて言葉を紡ぎ始める。

「私達はやれるべきの事はしたと思います。あれが自分達ではなかったら恐らく……被害はもっと拡大していたでしょうね」

「あれが満足に仕事を守ることができた？お前はそう思うのか？」

ウィルの意外な言葉にアレンは苛立ちを隠せなかった。

そんな彼の様子にも動じることなく、真っ直ぐと彼を見据えウィルは言葉を続ける。

「勿論、満足に仕事を遂行したとは思ってません。でも、今、あれだけの事が自分達では精一杯なんですよ。悔しいですけどね」

アレンはウィルの瞳に悲しげな表情が宿っていることに気が付いた。
考え方は違えど、ウィルもアレンと同じ気持ちなのだ。

第十六話

「悪い……ちょっと感情が高ぶってしまった」

「いえ……、それはお互い様ですから」

お互いに気まずい空気が流れる。

その時、ドアのノック音が聞こえ扉が開いた。

ドアの方に目を向けるとミーティアの幹部であるフェリクスと彼らの上司のアドルフの二人が入ってきた。

アドルフの方は報告を聞いて駆けつけたのだろう。

その表情はとても固い。

「二人とも大丈夫か？」

アドルフは心配したような声音で彼らを見るが、どうみても大丈夫な様子ではない姿を見て苦々しい表情を浮かべる。

その姿を見て、アレンは痛まれないと思ったのか微笑し茶化すような口調で言った。

「大丈夫ですよ、二人とも無事ですから。なあ、ウィル？」

「ええ。見た目は結構痛々しいですけど、大したことはありませんから……」

彼のその姿を見て、意図に気がついたのかウィルも合わせるように頷く。

だが、二人の思いとは裏腹にアドルフは突如、彼らを睨み付け怒鳴り始めた。

「何が大丈夫だ！お前ら無理してるんだろう！？二人とも顔は笑ってるが目笑ってない。

特にウィル、お前は痛みで顔が引きつってる！

人がどれだけ心配したと思ったら二人揃ってヘラヘラ笑いやがって……！」

アドルフは感情の自制が利かなくなってしまったのか、アレンの右頬に平手で一発打ち付けた。

アレンやウィルは突然の状況に目を開き、隣に居たフェリクスもまさかそんな事するとは思わなかった様子で彼を見ている。

ウィルの方にも一発撃とうとしたのをすかさずフェリクスは我に返り、上がったアドルフの手を掴んで止めた。

「フェリクス、何するんだ！こいつらは俺の気持ちも知らずに……！」

「アドルフ、まずは落ち着くんだ」

静かな声音でアドルフを諭す。

彼はまだ納得してない表情を浮かべながらも手を下ろした。

一呼吸置き、フェリクスは話始める。

「アレン君たちは辛い表情を見せてアドルフを心配させたくなかったんだよ。

だからああやって自分たちは大丈夫だよ、って笑ってたんだよ。

自分のせいで彼らを此処まで傷つけたと責任に駆られてるお前の辛い顔を見たくないの彼らの気遣いだ」

冷静になったアドルフは今、自分がしかした事を思い出すと羞恥

で顔が赤くなった。

彼らは辛いながらも自分に此処まで気を使ってくれていたのか。そう思うと涙が出そうになるが、此処はぐっところえて彼らを見つめる。

そして、アレンの頬に手をかざして一言呟いた。

「いきなり頬を叩いて済まなかった。叩いた俺が言うのもなんだが、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ、そこまで柔に訓練に臨んでませんから。気にしないで下さい」

アレンはそういつてアドルフに笑いかける。

その後、どうしたらいいのか分からずアドルフはバツの悪そうな顔をし、目を泳がせる。

そして半ばやけくそ気味にこう言い放った。

「二人とも何か食べたい物はあるか？さっきの詫びだ。俺が買ってきてやる！何でも言え！」

まさかそんな発言が出るとは思わなかったのか彼らは一瞬驚いた顔を浮かべたが、

直ぐに表情を戻し、それなら……と彼らは口々に自分が今欲しい食べ物希望を言い始めた。

「本当ですか？じゃあ、僕は特大プリンに、チョコレートケーキ、チーズケーキ、モンブラン、後、最近、巷で流行ってるお隣のデザートの杏仁豆腐って言うのも食べてみたいです！ウィル、お前は何にする？」

「そうですね……。私は今、こんな状態なので……。食べやすい食べ物がいいですね。プリンとかゼリーとか」

現在の時刻は深夜を回っている。

開いている店といえかなり限られてくるだろう。

確かに何でも買ってくれるとは言ったが今の状況を照らし合わせてみて、限度というものは分からないのだろうか……。と、アドルフは一回ため息をつきながらも、彼らの注文を一つ残らずメモに取っている。

「まったく、こいつらだけは……。特にアレン、お前そんなに食べてたら太るぞ。

それじゃ買いに行ってくるからな。フェリクス、今この時間に開いている店屋は何処にあるんだ？この国最大の都市だったらこのぐらいの注文を揃えられる所あるんだろう？分かったらとつと教えて案内しやがれ」

「本当に君は素直じゃないんだから……。いいよ、付き合う」

恥ずかしいのか、アドルフの横暴な言い方にフェリクスは苦笑いを浮かべつつも二人は彼らの希望のデザートを買いに行くため部屋を出て行ったのだった。

第十七話

アレンとウィルが病院に收容されていた同時刻。

アレシアとの境に当たるダヴィド郊外のとある廃屋で二人の男女が話をしていた。

窓の外から見やっても遠くからでもあちこちで緊急用の明かり飛び交い、混乱しているアレシアの様子がよく分かる。

この廃屋は周りは程よい高さの森に囲まれている為、身を隠すには丁度よく、こうして監視する場所として使用されていた。

「んー、向こうもいい感じになってきてるわねえ……。まあ、あのソルドの二人が出てきたのはちょっと想定外だったけど」

金髪を揺らしながら吸い込まれるような碧眼で外を見やりつつ、自分のわき腹に薬を塗って包帯を巻きながらそう呟く。

それを見ていた灰色の髪の男は手伝おうか？と手を差し出すが、女はことごとく拒否をした。

「いいわよ、このくらい“フセヴォロド”でもつけておけば治るわ。この薬は切り傷の治療薬として最速に細胞を活性化させて塞ぐ力のある薬なんだから。それより私は貴方のほうがよっぽど重症に思えるのだけれど？」

手を差し出した男の手や体は傷だらけになっていた。

服もぼろ雑巾のように擦り切れてしまっている。

だが、男は別に大丈夫だ、と女に背を向けた。

「ふん……、折角人が親切に手を差し伸べてやったというのに。このぐらい大丈夫だ。」

それより、あの計画は順調に進んでいるか？」

「私を誰だと思ってるの？ 仮にも組織の重要四大幹部なのよ？ 順調に進んでなきゃおかしくなくて？」

「毎回のお前のその言い方が気に入らないが。まあいい、これからどうする」

「そうねえ……。あの二人、邪魔はされたけど重要な人材だったりするのよね。それをむざむざと無駄にはしたくないし。まずは計画を第一段階から第二段階へ進める餌がいるわね」

女は少し痛み顔に顔を歪ませながらもきつく包帯を巻きつけた。まだ完全には塞がっていないのか包帯には血が滲んでいる。

「その餌を持ってきて頂戴。私は別ルートで計画を実行させるエネルギーを持ってきて完成させるから」

「分かった。私はあの人の為に全力をつくしているような物だからな。餌となる人物を組織本部に連れてくる。またその時に向こうで落ち合おう」

男は身を翻しドアに手をかけて向こうの道へと歩き始めた。

そして自分が持っていた短刀を数本手に取った後、五芒星のようになるよう一本ずつ地面に突き刺し目を瞑った。

刺したナイフの場所からは眩いばかりの光量が発せられ、地面に手をついた瞬間、そこに居た男の姿は完全に消えてしまっていた。

その姿を見送った彼女は少し唾を吐き捨て、忌々しそうに自分の愛剣を地面に突き刺してそれにもたれる。

「あの人に全力を尽くす……ねえ。残念ね、貴方はあの人にそのままで信用されてなかったりするのに。それを知らないなんて愚かなのかしらね」

女は大剣を突き刺したまま、妖艶な笑みを浮かべながら手元にあった鋏を弄ぶ。

そしてその鋏を横に投げて数回転させた後、壁に掛けてあった写真に突き刺した。

その写真にはさっきの男の姿が写っており、空いた白い部分には筆記体でセレス・クレメンテと書いてあった。

「次の仕事が終わったら……。貴方はもう用済みなのよ」

写真に向かってそう語りながら痛むわき腹を押さえながら椅子から立ち上がり

自分の愛用武器である大剣を背負った女はまるでこの仕事を楽しむかのように闇が広がる暗い森の中へと足を進めていった。

第十八話

翌日、アレシア市内は混乱に満ちていた。

突然の襲撃とあって市民は不安を隠しきれない表情で一杯になっており、中にはミーティア本部に詰め寄って暴動を起こしかねない人も出てきたらしいが警備隊が厳しく鎮圧させたらしい。

朝、ウィルは病室においてあるテレビを付けるが、何処のチャンネルも昨日起きたアレシアの郊外地区の襲撃事件で持ちきりであるようで、しばらくしてからリモコンのスイッチを切ってしまった。

未だに麻酔が効いており、傷の状況から見て、特に全身を動けるようなことは出来ないため午前中は暇を持て余しながらも窓の外をしきりに見上げていた。

昼からはアレン達が彼のお見舞いへとやってきた。

その隣にはなぜかフィオナにいたはずの警備隊長のノエル・イザベラも一緒に並んでこちらへ向かってきた。

彼女はお見舞い用に持ってきたフルーツの盛り合わせを机の上に置き、心配そうな表情でウィルの方を見る。

「具合はどうですか？……と言ってもその様子じゃあまり良くないようですね……」

「いや、そんなことは無いですよ。確かにちょっと見た目はショッキングだけど……。たいしたことはないですから」

手をわずかに動かして大丈夫だという意思を伝える。

だが、包帯で固定されている為か、動きは少しぎこちない。

「ったくよ……。朝、泊まってる宿舍の部屋にいきなり乗り込んで

きたと思えば、お見舞いへ行こうだなんて言いやがって……」

アレンはノエルが居るからなのか少し不機嫌な口調でそう言った。その言葉を聴いたノエルは不服と感じたのか彼を睨み付け、声を荒げ言い返す。

「あんた、その言い草は何よ！そりゃ、二人が謎の襲撃犯に襲われたなんて聞いたらこっちはたまったもんじゃないわよ！特にあんたは無茶し過ぎるんだから……」

「だからって言ってもそっちには電報で大丈夫だって打っただろ！わざわざ来るなよ！」

「ちよつと！二人とも落ち着いて……」

いつもは二人の仲裁をしているウィルだが今回に限っては、体を上手く動かすことが出来ずに口で言うしかない。

だが、当の二人は全く聞いてないようで声はだんだん大きくなり話はさらにヒートアップしていく。

「わざわざ来るなんて幼馴染にいう言葉！？大体、あんたは無茶すぎるのよ！毎回私がどれだけ心配してると思ってるの！」

「五月蠅い！お前に心配されることなんかない！」

「はあ！？じゃあ、あんたが昔、連続通り魔に刺されて死にそうになつてたのをずっと看病してたのは誰だっけ？」

「うつ……そりゃお前が勝手に看病してたんだろ！！あの時は看護婦さんも叔父さんも手伝ってくれてたしお前なんかの手伝いは……」

「おい、その二人いい加減にしやがれ！」

取っ組み合いが始まりそうな寸前、丁度、ドアを開けて入ってきたアドルフのきつい仲裁により二人は驚いて黙ってしまった。

彼に気づく暇も無いほどいきなりきつい拳骨をいきなり喰らったのだ。驚いて黙るのも無理は無いだろう。

眉を吊り上げて睨み付けているアドルフに恐怖を感じたのか二人は黙って下を向くしかない。

「お前らはその歳にもなって何をやってるんだ！場所を考えろ！ほら、謝れ！」

「えっ……だってあいつがいきなり……」

その言葉を聞いたアドルフはさらに厳しい表情を向けて二人を睨み付けた。

その目はあまりにも鋭く二人は思わず後ずさりしてしまう。

「だってクソもあるか！やらないんだったらこっちが無理にでもやらずがそうでもないのか？」

「わ、分かったわよ……。アレン、言いすぎたわ。ごめんなさい」

「こっちもちよつと言い過ぎた。悪かったな」

若干、アレンとノエルはふて腐れた表情を浮かべていたが、二人の謝罪で事が収まり一段落したところでアドルフは近くにあった椅子を引っ張り出し座った。

他の二人も同じようにウィルのベットの周りに椅子を置いて座る。

そしてアドルフは一回咳払いをし、話を紡ぎ始めた。

第十九話

「今はこんなくだらない喧嘩をしてる場合じゃないんでな。勝手に仲裁をさせてもらった。本題に入るが、今日、ミーティア本部で幹部による重要会議が行われた。」

アレシア郊外にある倉庫地区ではいかんせん夜では人通りがほとんど皆無であり、残念ながらお前達以外目撃者も全く居なかった。だが、アレンが持ち帰った加害者側の一本の投げナイフから一つの情報を得ることが出来た」

アドルフは持つてきた資料を捲り三人にそれを見せた。

資料はカラー写真となっており、セミショートで髪の色は灰色・右耳には趣味があまり良いとはいえない大きな十字架のピアスが特徴的である男が映っていた。

その写真を見て男の顔に見覚えがあるのかアレンは何か気がついたように声を少し上げた。

「この男……あの時の」

「ああ。お前が言っていた男の特徴と照らし合わせ、なおかつナイフの出所もあわせるとこの男しか残らない。名前はセレス・クレメンテ。元ミーティアに勤めていた奴だ」

「何だって？」

アレン達は意外な事実に驚きを隠せない。

彼らの反応は予想していたのかアドルフは余計な事は何も言わず話を進めていく。

「昔、技術部に勤めていた奴なんだそう。このナイフも精神登録技術を応用して作られた投げナイフであり、体に付けた専用のアクセサリーで自分の意思でナイフを自由自在に動かすことが可能らしい。まあ、簡単に言えばラジコンみたいに離れていても動かすことができるようなものだ」と聞いた」

「そうか、だからあんなことが出来たのか……」

あの時の出来事はなぜ起こったのかやっとな理解できたアレンはなるほどと軽く頷く。

「しかも、この技術を作ったのはセレス本人なんだそう。開発者なら応用も容易いだろう。すぐさまミーティア本部は指名手配を掛けている。

こんな技術を持った危ない奴をむざむざと野放しには出来ないだろう。

とりあえず、今日はアレシア全地域に外出禁止令が敷かれ、一般人は安全が確認されるまでは外に出ることは出来ないそう。それと、ウィルがなぶり殺しにされそうになった金髪の女については情報が全く出てこない。こちらで全力で探してはいるがもうしばらく掛かりそう。すまない」

アドルフに謝られて一瞬どうしていいのか分からなくなったウィルだが直ぐに顔を上げて彼の表情を見据えた。

だが、彼の瞳には悔しいという感情が見て取れその場にいた人々はそれ以上何も言わなかった。いや、言えなかったのが正しいだろう。空気を換えるようにアレンは話題を切り替えてアドルフに話しかけた。

「しかし……なぜ、ミーティアに勤めていた人物がこんな事を？」

「さあな……。反逆者となった理由は本人にしか分からない。たかが技術者がこの国を乗っ取れると思わんしな。調査待ちだ。とりあえず、ウィルは容態が良くなるまでこちらの病院で治療を続行、アレンはこの後すぐさま本部へ来てもらう。その女の子は直ぐに家に帰れ。一般人には身の安全を確保してもらおう」

一般人と間違えられたのに驚きを隠せなかったんだろう。

ノエルはアドルフに視線を向けて否定した。

「私、一般人じゃないですよ！フィオナの警備隊長のノエル・イザベラよ！私にだって市民を守る義務があるわ！アレンと一緒に仕事させて！」

「何？一般人じゃなかったのか。すまない。しかし……。君は警備隊長なのだろう？此処も大変だが自分の街も守る使命の方がよっぽど大切なんじゃないかい？」

「それはそうだけど……」

ノエルはそう言って黙ってしまう。

そんな彼女を見越してアドルフはゆっくりとした口調で話しかけた。

「君を待っている部下も居るはずだ。こっちは私達に任せて、フィオナの街の警備に当たって欲しい。彼ら襲撃犯はアレシアを出て他の街へ行っているという可能性もあるんだ。

当然、フィオナが危なくないという保証は無い。だからこそ今の状態を知っている君にフィオナの警備をして欲しいんだ。手口は分かっている。だから人員を増やして対処することも出来るかもしれない。今回は私達ソルドの奴らだったが次は市民に襲ってくるかもしれない。

れない。だからやって欲しいんだ」

「……分かりました。確かにそういわれると私は自分の職務を少しおろそかに考えていたのかもしれませんが。市民を守るためにフィオナに戻ります」

「それでこそ、立派な警備隊長だ。よろしく頼むぞ。帰るのは直ぐの方が良いな。病院の玄関にミーティアの人たちが待っている。事情を話して直ぐに駅へ向かって帰りなさい」

「了解しました！」

そういつてアドルフに敬礼をしアレン達に軽く挨拶を済ませた後、ノエルは部屋を出て行く。アレンは上司の説得力に内心驚きを隠せずこのような説得の仕方もあるんだなと彼の中での上司の評価が上がったのは言うまでも無い。

「あいつを説得するの上手いですね。昔からいうと聞かない子だったのに」

彼のあまりにもざつくばらんとした感想にアドルフは少し笑う。だが、直ぐに表情を戻して穏やかな口調で言い始めた。

「彼女は出来る子だと思う。そしてプライドも高くて周りの人を放って置けないんだろう。」

自分の父親もそんな感じの人だったからなんとなく分かるんだよ」

「へえ……アドルフさんの父親ってそんな人だったのか……」

「あの人は気になる人がいたらそうやって説得させてたからね。」

もし父親が此処にいたらそういうこと言ってたのかなって思ったからそう言っただけさ」

「なんか、アドルフさんってファザコンだったのか……。ちよつと意外だなあ」

薄ら笑いを含めて表情をにやけさせているアレンを見て、アドルフは少し焦った表情を浮かべていた。そして照れ隠しなのかアレンの頬を少しつねって黙らせる。

「痛いですつてば！」

「五月蠅い！お前が余計なことをいうからだ！俺は決してファザコンなんかじゃないぞ！ただ単に尊敬してるだけだ！ってもうこんな時間じゃないか！そろそろ行くぞ、アレン」

これ以上、アドルフは自分の事を話するのが恥ずかしくなったのだろう。

彼はそういつてアレンの手を引っ張った。

その姿はどう見ても照れ隠しにしか見えず、ウィルは笑いながら、じゃあ、お二人とも頑張ってくださいね、と一言声を掛け、二人はミーティア本部に向かうためドアを開けて出て行った。

第二十話

ウィルのお見舞いを済ませた二人は駅前でノエルと別れ、ミーティア本部へと向かった。

現在、アレシア全域に外出禁止令が敷かれて居る為、街中には誰一人歩いていない。

もともと唯一歩いているのは街中の警備をしている警護の人々だけで、商店街も大型量販店も飲食店も全て臨時休業の看板を出して店を閉めている。

「僕はにぎやかなより静かなほうが好きだけど、此处まで行くと味気ないな」

「仕方ないだろう。反逆者がうるついているかもしれないんだ。今は組織連中にしか攻撃してないみたいだが、いつ市民に刃を向けるかわからない。外出禁止令を出さざる得ないだろう。もともと、この国の中で一番安全だと言われていた都市がこの前の事件で神話が崩れたからな。ミーティアとしては何とかしたい一方なんだろうが……」

そんな会話をしつつも二人はミーティア本部の玄関へと歩いていく。現在の本部は以前に比べて嚴重な警備が敷かれているのか、身分証明書その他に入室証明書まで書かされるようになっていた。必要な書類を書き込んだ後、彼らは受付嬢に案内されエレベーターに乗り込み、フェリクスの待つ管理室へと向かっていった。

管理室ではフェリクスの他に二十人程度のミーティアの幹部が集まっていた。

流石、国の中枢を担っている組織だ。このぐらい人数が居ないと各支部を統括するのも大変だろう。

フェリクスは彼らを席に薦めると同時に自らも椅子に腰をかける。

そして、それまで話をしていた幹部達は沈黙し座った彼らに一斉に視線を向けた。

全員揃ったのを確認し、フェリクスは彼らに今回の集まりの目的を話し始めた。

「今回君たちを呼んだのは、証言の聴取と今後の計画の為だ。特にアレン君はセレスに会っている。あの男が一体何をしたのか詳しく事情を聞きたい」

「聴取の為、ですか……」

アレンは予想はしていたのかそれ以上何も言わない。

だが、聴取は苦手なのか少し困ったような顔を浮かべる。

それを見ていた他の幹部は彼を安心させる為にこう言った。

「大丈夫。聴取と言っても尋問するような真似はしない。神に誓って約束しよう。確かに我らミーティアと過激派ソルドは本来ならば相反している組織だ。しかし、今は緊急事態だ。そんな事を言っている暇は無い。現に、今回の事件で死人が出てしまっているからな」

「分かりました。……それなら聴取を受けても構いません」

「そうと決まったら、アレンは別室に移動してもらう。アドルフには今後の計画について話を進めておきたい」

了解しました、とアレンは返事をし席を立つ。

そして、ミーティアの書記官に連れられて部屋を出た。

部屋を出た彼をアドルフは軽く目で見送った後、フェリクスに話しかけた。

「で、何故俺が呼ばれたんだ？ミーティアとソルドの合同戦略計画の話をするのであれば、俺の親父を連れて来て話をつければ良いだろう。」

あの人は人事・戦略・主導を束ねている組織の最高責任者のはずだ。俺と一緒にアレシアに来たから市内に居るだろうし、飽くまでも俺の仕事は親父から来た組織の命令を管理する事だ。勝手に部下の主導を取って突っ込む事は基本的には許されていないし、そもそも管轄外だ」

「まあまあ。そうも言わずに私の話を聞いてくれないか、アドルフ」

フェリクスは彼を宥めるような口調で話しかけ始める。

さっきの話で少しざわめいていた幹部達は皆、黙り彼の話を聞き始めた。

「今回君に来てもらったのは、他でもない。君のその管理能力の力を借りたいからだ。」

君の情報管理能力はずば抜けている。訓練学校時代の君はその能力が既に出ていたな。

二年生の時の夏に私の事が好きな女の子の情報がまるっと全部欲しって言ったら、わずかに十分足らずで全て集めてしまったものな…

…。あれには流石に私も舌を巻くようなものがあって……」

フェリクスがその話をし始めた瞬間、見る見るうちにアドルフの顔は赤くなり、彼を怒鳴りつけた。

「馬鹿！その話はやめろよ！……つまり、俺が今後の計画を上手く

情報統制して各組織の部下達に指示していけばいいのだな？」

「そういう事だ。勿論、今後の合同戦略計画はソルドの組織機関長……君のお父様に伝えておく。ミーティアの幹部が此処と各支部を合わせるとかなりの人数になり、情報統制が難しいのだよ。一度誤報が回ってしまうと修正するのに時間が掛かる。情報の素早さとの確さは君に勝るものはないと思っている。

だから、君を推薦したんだ。今日はその事を話す為に此処に来て貰ったのだよ」

「だったら、ウィルのお見舞いに来たあの時に一言言えばいいものを……」

「いや……まあ、言いそびれてしまったね。今日、アレン君が証言の聴取に来るのなら、ついでに君も一緒に来てもらおうかと思って……」

「なんだよ……水臭いな……。分かった、じゃあ、詳細な戦略計画は親父によろしく頼むな。俺は他のソルド支部の様子を見てくるから」

アドルフは他の幹部達にそう伝えて席を外す。

そして、幹部の一人から合同戦略計画の詳細機密文章書類を手渡されフェリクスにお父様によろしく、と一言告げられ管理室を後にした。

第二十一話

アドルフが今後の事について管理室で話をしていた頃。
アレンはミーティアの書記官に連れられて、聴取室へと足を運んでいた。

中に入るとソルド聴取室と同じような質素なテーブルと椅子が対面に並んでいる光景が目に入り、今から尋問を受けるような感覚へ陥るような気がしてならず、彼は少し表情を強張らせていた。

「じゃあ、その席に座ってください」

書記官に促され、アレンは席に座る。

それと同時に書記官は席に座りノートを開いて聴取を始めた。

「ええっと……アレン・ハロルドさんですね。男の攻撃の特徴やその他分かるような事が何かあれば教えていただきたいのですが……」

「男の主な攻撃の特徴は投げナイフでの意思操作ですかね。今知ってること以外で分かることといえば、右耳に十字架のピアスをしていたことと腕に何らかのブレスネットをしていたことですかね」

「十字架のピアスはこちらでも情報がありましたか……ブレスネットですか。それは……うちの中ではまだ聞かない話ですね。他に何かありますか？」

「いえ、それ以外には思い当たらなくて……」

「そうですか。聴取のご協力感謝します。もう戻られても結構ですよ」

案外あっさりと聴取は終了し、アレンはドアを開けて部屋の外に出た。

と、同時にアドルフも話が終わったのか管理室から出てきたようだ。フェリクスと少し何か会話した後、見る見るうちに不機嫌な表情へと変わっていく。

扉が閉まった後、アドルフは玄関に向かう為、エレベーターの所へと歩き始めていた。

「全く……あいつは昔から変わらん。俺がお前のために女の子のデータ集めただけなのに……他の幹部らに勘違いされたらどうするつもりなんだよ……」

「どうしたんですか？」

背後にアレンが居ることに気がつかず、アドルフは驚き躓いて転んでしまった。

その様子が妙におかしくてアレンは笑い始めたが、当のアドルフはますます不機嫌になるばかりだ。

アレンとしてはいつも彼らを纏めているアドルフの焦り具合が気になるが、聞いてもなんでもない、と答えるばかりでこちらとしてはあまり面白くない。

「女の子がどうかって聞こえたんですけど……何やらかしたんですか？僕、嫌ですよ。ソルドの権限でアドルフさんをわいせつ罪なんかで捕まえるなんて」

「わいせつ罪だと！？んなこと一つもしてないって言ってるだろ！」

さらに機嫌が悪くなり、アレンの頬っぺたを抓り出す。

いつもの倍ぐらいの力で抓ったらしく、ギブ！ギブですから、やめてください！とミーティア本部内で声が響き渡ってしまい、何事かと部屋を飛び出してきたフェリクスが二人に向かって説教をし始めたのは言うまでもない。

彼らが説教から開放されたのはそれから一時間後の事であり、時刻は既に夜の九時を回っていた。

思いのほかフェリクスの説教が長くなってしまったからである。

二人はミーティア本部を出た後、借りているミーティアの寮の部屋に帰る為に暗くなった大通りの道を二人で歩いて並ぶ姿は少し童心に返ったように見えた。

依然として辺りは街灯以外の明かりはなく、寂しい光景が連なっている。

最初に口火を切ったのはアレンだった。

「アドルフさんが怒られるなんて本当に珍しいですね」

「全部お前のせいだろう！お前があんなでかい声で叫ぶから……」

「だって、痛いもんは痛いですよ！それにやったのはアドルフさんだし？僕悪くないですし？」

元の原因を作ったのは確かにアドルフの為、彼に対して反論が出来ず黙り込んでしまう。

そんなアドルフの姿を見かねたアレンは、じゃあ、気晴らしの為にどっかで買って飲みましょうよ！といったもの軽口で言った。

どうせ、真面目なアドルフはいつもの通り、馬鹿かお前は！仕事が優先だろう！と突っ込むだろうと予想していたのだが、返ってきた言葉は思いもよらない返事だった。

「ああ、たまには悪くないかも知れんな。その自販機で缶ビール買ってこい」

「本当にいいんですか？」

「いいから、ずべこべ言わず買って来い！」

アドルフにそう怒鳴られ、渡されたお金で缶ビール二つを買ってくる。

そして、近くの公園のベンチに座りそれを彼に渡すと彼はすぐさま缶をあけ一気に飲み干す。その表情はどこか憂いに満ちていた。

「やっぱりビールは美味いな。つまみがあればもつと良いんだろうが、この状況じゃあな……何日ぶりに酒を飲んだんだろうな」

「まあ、コンビニも全部閉まっちゃってますからね。今あるとすれば自販機だけだし。明日には警報レベルが下げられるみたいですから、店は開き始めるんでしょうけどね……。そんな事言っなんていつものアドルフさんらしくないですよ？」

組織内で一番仕事に厳しいと言われるアドルフがこんな事をするのは珍しい。

いつもと違う彼をアレンが心配するのは無理は無いだろう。

アドルフは一つため息をついて、缶ビールを軽く回しながら何処か吐き捨てるような口調でアレンに言った。

「まあ、上司やってると色々と悩みはあるもんなんだよ……。それでさ、アレン……」

「何ですか？」

いきなり話を振られるとは思わなかったのかアレンは少し驚いたようにアドルフに視線を向ける。

そして、いつもの彼らしくない調子で言葉を紡ぎ始めた。

「俺ってさ……。本当にちゃんとお前らを纏められてるのかな」

「どうしたんですか？急に……」

彼の意外な本音にアレンは驚きを隠せなかった。

アドルフは自分の仕事に誇りを持っている。だからこそ他人にも自分にも厳しい。

その懸命な姿を毎日見ているアレンにとって羨ましくも尊敬できる上司だと思っていたからだ。

当のアドルフはそんなアレンの反応を気にしつつも、少し自嘲的な口調で言葉を続ける。

「いや、お前らってさどんな仕事でもちゃんとこなして無事に帰ってきてたじゃないか。

けど、今回のお前らは瀕死になりながら帰ってきたからさ……」。

あの時の姿が目から離れなくて……。自分の可愛い部下があんな姿になって必死に生きようとする姿を見ると自分の存在が怪しくなってきたな。もし、俺がもっと情報を集めて置いたら、お前らに此処まで痛い傷も負わずに済んだかもしれないって思うと……管理長失格だなんて……」

「そんなこと無いですよ！」

あまりの弱音の吐き具合を見かねたのか、アレンは強い口調でアド

ルフの言葉を遮った。

彼は驚いて目を見開いている。

「そんなこと言うなんて……アドルフさんらしくないですよ！僕とウィルにとつてはアドルフさんは懂れの上司です。今回の事件は恐らく、僕達が相手してなきゃ死人が出てました。

そのぐらい強い相手だったんです。情報が集められなかったんじゃない、相手の存在が謎過ぎて情報が出てこなかったんですよ。こればかりは誰にも責める事は出来ない。だからそんな表情で謝らないでください。あなたの情報管理が素晴らしいのは誰よりも知ってるんだから」

「……そうだな。こんな話をして済まなかった。ただ、俺の役割がずつと不安で仕方なかったんだ……。お前らが俺を必要以上に信賴してるのは良く分かってるからこそ、こうやって打ち明けちゃったのかもしれないな……」

「ほんと、アドルフさんらしくないですよ。でも、いつでも僕らは貴方を信賴してますから。第一、アドルフさんの情報処理能力はほんと目に見張るものがあって……っ？」

不安を打ち明けられて安心したのか、アドルフは手に缶ビールを保持ったまま寝てしまっていた。

敵の今後の動きは一切分からない。

だからこそ、アドルフは不安で仕方がないだろう。

今は安心できる環境をアドルフに作ってあげる必要がある。

その為には自分達が出来る限りの努力をしてあげよう。

そう思い立ち、アレンは持っていた缶ビールを一気に飲み干し、近場のゴミ箱に捨てた後、アドルフを背負って帰る為に歩き始めた。

辺りの街灯が少ないせいか、帰る時の夜空はヴィオラで見ていた時

より少しばかり綺麗に輝いていたように見えた。

第二十二話

アドルフを背負って寮の二人部屋に帰ったアレンは彼をベットのの上に寝かせた後、何気なく自分の携帯を開いた。

一件メールが着ている。

どうやら送り主はノエルらしい。

内容を見てみると、無事に自分が住んでいるフィオナの駅に着いたということだった。

ノエルが無事に着いたことにほっと胸を撫で下ろしつつ、彼女への返信へは明日にしようと思いを閉じた後、アレンは自分の上のベットへと横になった。

よほど疲れていたのか、彼は寝転んだ瞬間、瞼が重くなり気がついてしまった。

翌朝。

目が覚めたのは朝の十時を過ぎてからだ。

此処最近の仕事ばかりで、お酒を飲む暇がなく、久々に飲んだせいか少し体が重たい。

意外にもアレンが目覚まして起き上がった時には既にアドルフは支度を始めていた。

アドルフは気が付いたのか仕事の資料に目を通しながらも彼の方を見やった。

「起きたのか」

「それはこっちの台詞ですよ。公園で酔って寝てしまった人の方が早く起きてるってどういう事ですか」

アレンは少し苦笑いを浮かべた。

その様子をみたアドルフは確かに何でだろうな、と軽く笑い、言葉をつづける。

「昔から父親の仕事の関係上、早起きすることが多くてな。それで身についたのかもしれない。昨日はその……すまなかった」

「いえ……管理職ゆえの悩みだったんでしょ。いつもアドルフさんは僕の悩みを聞いてくれてるんだし、お相手ですよ。それより父親の仕事の関係上？折角の機会だから聞きますけど、アドルフさんの父親ってどんな仕事してるんですか？」

「ん？そういえば、話をしていなかったか。俺の父親はとある組織の管理職でな。主に人事を担当してた。彼の洞察力は並知れぬ物があつて、連れて来た人間はとてつもない能力を持った人間ばかりだった。それに他人の事に首突っ込むのが凄く好きで」

その時、ドアのノック音が部屋に鳴り響いた。

アドルフは手持ちの資料を机の上におき、ドアの小さな窓を少し覗いてから扉を開いた。

扉の前に現れたのは煌びやかな黒髪を靡かせ、アレンと同じ組織服に身を包んだ男性だった。

初老を超えているであろうその男はアドルフの姿を見た瞬間、にこやかな表情を浮かべる。

「おお、部屋に居たか。いつも時間に厳しいアドルフが現れないからどうしたのかと思って探したんだぞ。昼から仕事の打ち合わせがあるから早めに来て欲しいんだが　っ？」

男性はアドルフの横に居たアレンに気がついたのだろう。それと同時にアレンも嬉しさと驚きが混じった表情を浮かべ笑顔で

彼に近寄っていく。

「ミランさん！久しぶりです！国立アルマヴィオラ学校の入学試験以来ですね」

「おお、アレン。そうだな、あの時以来だな……。もうあれから三年経つのか。時が経つのは早いものだ」

「おい……。父さん、アレンを知っているのか？」

互いが顔見知りだったことにアドルフは少し驚いている。
だが、当のアレンはそのことよりも今、彼がいった言葉を聞き返さずにはいらなかった。

「アドルフさん今なんて……。？父さん？」

「ああ、ミラン・クライドは俺の父親だよ。それより何故、アレンが父さんを知っている？」

訝しげな表情を浮かべたアドルフを見て、ミランは簡単に説明を始めた。

「アレン君は昔、私が人事部時代に組織にスカウトした一人だね。その時に彼と出会ったのだよ。もっとも、それ以降、役職関係上出会ったことはなかったがね」

「なるほど……。父さんがあの時話していたのはアレンの事だったのか……」

「そついう事だ。さて、そろそろ世間話もこのぐらいにして出かけ

ようか。

アドルフ、やはり君が居ないと仕事は円滑には進められない」

「分かった。直ぐに準備する」

アドルフはそういつて机の上の資料を片付け、鞆の中に収めた。

そして、小型ナイフや警棒などの必要な道具を全て服の中や腰に納めた後、靴を履いてアレンに背を向ける。

「俺は父さんと打ち合わせに行ってくる。アレンは昨日打ち合わせで指示されたとおり、ウィルの容態の確認と街の警備に当たってくれ」

「了解しました」

二人が出て行くのを見送ったアレンは一息ついて椅子に座った。

そして、遅めの朝食を摂った後、組織服に着替えて襟をきちんと正す。

必要な道具類を全て腰に収め、鍵が閉まっていることを確認してから、今日の仕事に当たる為アレンは寮の部屋を後にした。

第二十三話

いつもより日照りが強いせいかとても暑く感じる。

今日から禁止令は解除され、大通りに面した店屋や露店も営業を再開したようだ。

襲撃の影響からか人はまだ少なめだが確実に以前のような日常生活の風景に戻りつつある。

彼らは寮を出た後、大通りに面して賑わっている商店街のほうへと足を運んでいた。

「彼には教えていないのかね？」

ミランは歩みを止めることなく、役職に似合わない軽い口調で彼に聞いた。

彼はそんな父親の姿に一瞬表情が崩れるが、直ぐにいつもの強張らせている表情に戻す。

「教えていないのかって……。父さんがそんな事を言うとは思わなかったな。」

元々、父さんの存在を知っているのは組織の中でもごく一部の上層部のみだし……」

彼の返答を予想していたのか、ミランはまあ、普通はそうだろうな、と軽く頷いた。

そして一呼吸を置いて、言葉を続ける。

「でも、アレン君が私の正体を知ったら驚くだろうな。まさか自分の組織のトップの人だとは夢にも思わないだろう」

「ああ、アレンは父さんの事を未だに人事部の人だと思い込んでるからな。まあ、今はその方がいいんじゃないのか？あいつに余計な情報を入れないほうが物事が捗る」

「おいおい、アドルフにしちゃ冷たいことを言うんだな。もっと部下に情報を与えるのが好きなのかと思っていたよ」

彼の言葉に意外だったのかミランは少し驚いた。

確かに部下にいつも厳しくしている彼のこの発言は日常生活での行いと少し矛盾しているように見えたからだろう。

しかし、当のアドルフはその姿を見て彼らしくない不思議そうな表情を浮かべる。

「意外？そうか？必要最低限の情報を与えて指示させるのが一番効率がいいことは明白だ。

変に要らない知識を増やして、作戦の妨げになったらそれこそ本末転倒だろう？」

「ほう……アドルフはそういう考えなのかね。私だったら上司として出来る限り最新の情報を与えて、部下に取捨選択させる方法が一番いいと思うがね。

確かに情報が多すぎると混乱してしまい、嘘の事も本当に見えてしまっただろう。

だがしかし、その方が考える力や見抜く力が伸びるし、上司に頼りっぱなしになってしまう駄目な部下になるリスクも少なくなる。

時には上司の判断が仰げず、独断で実行しなければならぬ時もあるだろうからね。

勿論、それは稀な話で、部下では担えない問題を解決に導くように上司は努力しなければならぬと思うけれどね」

彼の言葉にアドルフは少し面を食らったようだ。

いつものアドルフとは少し違った　まるで、プライベートの時に父親と話するような柔らかい表情を浮かべているようだ。

そして、彼は静かに笑い始めた。

「なるほどね……。俺はまだ父さんには勝てないわけだ。また今度の機会に徹底的に戦略について話をしたいものだ」

フィオナの第一警備隊長を務めているノエル・イザベラは机の上に置いてある大量の書類の整理をこなしていた。

彼女はフィオナに帰った後、眠りにつく時間が短かったのか少し眠そうに見える。

だが、彼女の中のプライドが居眠りという行為を許さない。

机の上には缶コーヒーが数本置かれており、眠気覚ましのためにたくさん飲んだようだ、その効果はあまり現れていないようだ。

整理しているその書類の中には、アレン達関わった『列車襲撃事件』や、先日起こった『アレシア襲撃事件』の事についても書いてあった。

彼女は書類整理に疲れたのか軽く背伸びをして、立ち上がり腕を軽く回した。

「あー、つたく、列車襲撃事件の犯人らが捕まったのはいいけど、まだ事情を話していない奴がいるから嫌になっちゃう。

早く聴取が終わらないと、裁判にも掛けられないんだよね。そっから先は警備隊じゃなくて司法の仕事だけど、それまでの過程を終わらせないと終日残業続きで困るわね……」

そんな独り言を呟きつつも、仕事を再開させようと再び椅子に腰を

掛ける。

作業を始めようとしたその時、彼女の部屋のドアのノック音が響き渡った。

『隊長、少し宜しいでしょうか？』

ドア越しに聞こえた声はいつも聞きなれた声だった。

彼女はどうぞ、と返事をする、彼女より少し若いであろう、金髪の青年が目の前に現れた。

「ベリエス、どうしたの？」

ベリエスと呼ばれた青年は背筋を伸ばし敬礼をする。

だが、ノエルは、こんな場所で敬礼なんかしなくてもいい、と彼を諭した。

予想外の言葉だったのかベリエスは少し困惑した表情を浮かべながらも、敬礼した手を下ろした。

「別に此処は承認式みたいな正式な場じゃないんだから、むやみやたらに敬礼しなくてもいいのよ。

寧ろ、そんなことばかり気がいつて街の人に危害が及ぶほうが私にとつてはおぞましい位だからね……それより何かあったの？」

「は、はい、実はその……隊長が昨日、空けていた時ですね。不思議な人が尋ねてこられたのですが。

その方はどうにも占い師らしくて」

「占い師？ごめん、私、オカルト的な興味はないんだけど……。まあ、いいわ。それでその占い師の方がどうしたの？」

「その方によりますと、現在、こちらの身に危険が及んでいるとか……。しかも彼女は、占いを始めてから数十年らしいのですがこんなに狂気を持った脈流は初めてなんだと……。こちらとしては意味不明な発言ばかりで隊員皆は困惑するばかりだったのですが、本人曰く、余りにも危険すぎるので、わざわざこちらに忠告にいらしたと……」

「へえ……こっちに身に危険が？」

「なんだかとても焦った様子で……。その時、直接話したかったようなのですが、隊長は居なかったもので、『分かりました、伝えておきます』と言って返したんですけど……。先輩隊員の皆さんはどうせオカルト商法か何かの勧誘でこちらの不安を煽るようなことを言っているだけだ、気にするな、って言ってたんですけど、どうにも自分にはあの占い師の方の表情が本当としか思えなくて……」

ベリエスはどうしたらいいのか分からないのか不安そうに彼女の顔を見つめた。

彼女はそんな彼女を安心させる為に、「大丈夫よ」と手に肩を置く。

「皆の言うとおり勧誘か何かだったんじゃないの？というか、皆ものん気すぎるんじゃないの？警備隊の本職分かってるのかしら？全く……ただでさえ書類整理に忙しいのに、部下の教育までに手間が回らないわよ……」

ベリエス、悪いんだけど、皆に言うておいて欲しいの。不審者を見かけたらちゃんと仕事しろ！ってね。」

「わ、分かりました……」

彼はおどとした表情を浮かべ、部屋を後にする。

おそらく最後の一言を言う時、彼女の表情が少し不機嫌だったからだろう。

ノエルはため息をつくと再びデスクに向かい書類整理を始める。

「こつちに身に危険が及んでる……か」

元々、非科学的なオカルト話には興味はなく、今の話も丸々と信じるつもりもない。

だが、何となく警備隊の隊長として胸騒ぎがするのは何故だろうか。

「あー、もうこんな事考えてたら残業伸びちゃうし！」

彼女はそんな独り言を呟きながらもデスク作業へと取り組んでいた。

第二十四話

平和が日々が続いたのもほんの数日。

書類整理が終わった翌日から、警備隊の仕事は事件等で多忙を極め、自身が受けた忠告もすっかり忘れていた。

そして、ある日の銀行強盗事件での現場検証に立ち会っていた彼女の元に部下からこんな報告を受けた。

「隊長、少しお話があるのですが……」

彼女の部下の一人であるストレートに伸ばした金髪の青年・ベリエスは何やら複雑な表情でノエルの元へと近づいてくる。

その表情から重要な用件を感じ取ったのか、彼女は作業を他の部下に任せ、彼の方へと歩み寄った。

「どうかしたの？」

「いえ……実は、フィオナ市内にあるサンベルノ郊外にて、不審者が見つかったという連絡が入りまして。こちらの独断では決めきれないと判断したので、隊長に指示を仰ぎたいのですが……」

不審者、という単語を聞いた瞬間、彼女の表情は鋭い表情へと変わった。

直ぐに近場にいた数人を引き寄せて指示を飛ばしていく。

「また何かあったら無線で連絡するのよ」

ノエルがそう言うと、部下一同は、了解しました、と軽く頭を下げて、サンベルノ郊外へと向かうために車に乗り込んで発進させた。

彼女はその後ろ姿を見届けた後、先ほど作業していた場所へと戻っていった。

あれから既に一時間。

彼女の現場検証の作業が終わり、サンベルノ郊外で作業している部下に連絡を取ろうとするが、無線での応答が無いことにノエルは苛立ちと不安を隠せなかった。

彼女は部下の教育に厳しい事で有名であるが、同時に部下からの信頼も絶大であり、連絡が途絶えるということはありえない筈だった。

「変ね……何かあったのかしら」

「サンベルノ郊外は此处から遠くは無いはずですし、無線圏外の場所でもありませんね……。少し様子を見に行ってみますか？」

茶色の髪を切り上げ、薄いエメラルド色の瞳を持った青年は横に立っている彼女にそう聞いた。

ノエルも彼の意見に賛成らしく、そうね、と一言呟いた後、無線機をポケットにしまい込み、直ぐにサンベルノ郊外へと向かえる様に車の手配をし始める。

移動する車の中で彼女は窓の外を見上げながら、先日、ベリエスが言った発言が頭の中へと蘇ってくる。

現在、こちらの身に危険が及んでいるとか

いくらなんでも偶然にしては出来すぎている。

こんなに簡単に結びつけるのもどうかしているだろう。

だが、自身の中で蠢いている第六感が警鐘を鳴らしているのは何故

だろうか。

そんな事を考えているうちにサンベルノ郊外へと車は進めていく。やがて、狭い裏路地に車を進めていった時、道の脇に何かが倒れているの見つけた彼女は直ぐに車を止めるよう車内で叫んだ。

「止めて！」

彼女のいきなりの指示に驚いたのか、部下はブレーキを踏み急停車する。

慣性の法則から体が前方へと少し倒れるが、彼女は体勢を取り戻し、ドアを開けて下車する。

そして、倒れている物らしき所へ近づき足を止めると、予想外の光景が目に入った。

止まった彼女の後ろにいる部下達も悲鳴を上げて、驚きの表情をあげている。

「……なんてことだ」

そこには彼女が所属している警備隊の服を着た男が血まみれで倒れていた。

服はずたずたに切り裂かれて、見るも無残な姿へと変貌している。

彼女は念のために、近づいて脈を取るが、既に男は死んでいるようだった。

信賴していた部下の残酷な最後の姿に彼女は怒りを露にする。

「誰がこんな事を……」

ノエルは視線を先に見渡した。

道には血痕が転々と続いており、何かの襲撃があった事は明白であった。

彼女は、何も言わずに急いで血痕がある先へと足を進めていく。足を進めたその先には薄暗い広場があり、何処となく寂れた風景を醸し出していた。

だが、いつもの広場とは不釣合いの光景が彼女らの目に映った。先ほど倒れていた警備隊の部下と同じ服を着た男らが、血まみれになって数人倒れており、その先で彼女らと同じ警備隊の服を着た金髪青年が優雅に仁王立ちをしていた。

「遅かったじゃないですか。隊長という位があるんならもっと早く異変に気づくべきでしたよね」

不敵に　いや、不気味に笑いながらこちらを向いている青年の姿に彼女は驚きを隠せなかった。

彼女の後ろにいた部下達も同様の反応を示し、言葉を失っている。

「ベリエス、あんた」

「ベリエス？ああ、この人の事か。いやあ、彼がまさか貴女に忠告してくるとは。」

そもそも、あの占い師が貴方の元を尋ねてくるなんて想定外だったし。それと、彼にはこれ以上面倒なこと起こされたら困るから……そこに吊り上げておいたぜ」

男が指すその先には、彼と同じ格好をしている青年が壁に貼り付けられた状態でいた。

恐らく、此処での男と入れ替わりの時にやられたのだろう。

その姿を見るにもう既に息はなさそうだった。

「じゃあ、サンベルノ郊外の通報は嘘だったの……？あんた……何者なの？私の部下をこんな事にしといてただで済むと思ってる？」

ノエルは齒を強くかみ締め、腰に掛けてあつた拳銃を取り出し、中央へ立っている彼の方へと銃口を向けた。後ろにいた部下達もそれに倣い、彼に銃を向ける。

だが、中央にいる彼はその姿に全く臆することなく、彼女らを睨み付けていた。

「もうその時には既に入れ替わつてたからな。気づかない貴女に対して笑いを堪えるほうが辛かったですよ……。それに、お嬢さん、何か勘違いしてますが、世の中、痛み無くして得るものはない。まあ、これだけ暇な警備隊だと、それに毒されて平和ボケしちゃうんでしょうね。最も、それが一番に顕著に現れてるのは貴女だったりするんだけど」

「口が過ぎるのよ！黙りなさい！」

ノエルと部下は彼に向かって数発銃弾を打ち込む。

だが、男は何事にも臆することなく銃弾を避けた。

そして、彼の手に一つのナイフが握られる。

彼らが武器を持ち替えるほんの一瞬の隙を突いて、男はナイフを次々取り上げて投げていく。

ナイフは重力に逆らい、真っ直ぐに飛んでいき、部下の体に当たったのか後ろで小さな悲鳴が上がり始める。

彼女は持ち前の体術を利用し、攻撃を避けるが、流石に投げってくる数が多すぎたのかすべては避け切れなかった。

足や腕には擦り傷がいくつかついていく。

それと同時に男の攻撃スタイルを見た彼女は何かに気が付いたようだ。

「貴方……セレス・クレメンテね？」

男 セレス・クレメンテは大当たりと言わんばかりに軽い拍手をし、自身がつけていた変装用のマスクを剥ぎ取った。灰色の髪を切り上げ、趣味がいいとは言えないピアスを右耳につけた彼は、何処かに楽しそうに彼女を見据える。その姿をみた彼女は氣に入らない、とばかりに齒を食いしほりさらに睨み付けた。

「ご名答。さすが、ソルドに幼馴染がいるから情報が早かったか。まあ……貴女の実力というもののやらを見せてもらいましょうかね」

そう言ったと同時に、セレスはこちらに向かって駆け出す。

彼女はそんな彼の姿に動じることなく、腰に掛けてあった長刀を手に取り詰め寄っていった。

だが、所詮女の力。

詰め寄るノエルに彼の攻撃はあっさりとはじき返され、彼女は体制を崩した。

その一瞬の隙に、セレスは彼女に詰め寄り首元に数本のナイフを差し向けた。

ナイフは宙に浮き、全ての急所に差し向けられている為身動きが取れない。

そして、後ろで彼女に応戦していた部下は、既に全て負傷し、倒れこんでしまっている為、助けを求めることも出来ない。

苦虫を噛み潰した表情でノエルは彼を強く睨み付けた。

そんなノエルの姿にも臆することなく、セレスは何処か楽しそうな表情で彼女を見返す。

「貴女には彼の餌となる役目を果たしてもらいましょうかね」

そういったと同時に彼女の首元に男の手刀が入った。

首元に衝撃が走ると同時にノエルは気を失い、倒れこむ。

「やれやれ……お嬢様は中々気の強いお方みたいだ。エスコートする身の方も考えて欲しいね」

冗談交じりでありながらも、何処か嬉しそうにセレスはノエルを片手で抱きかかえてそう呟くと、あの小屋の外でやったように、地面に五芒星を描き、手をつけた途端、大きな光に包まれ、彼らの姿は一瞬にして消えてしまった。

残された部下達はその姿をただ呆然と見つめるしかなかった。

第二十五話

セレスは彼女を抱えたまま、再び目を開くと、先ほどの景色とは一変し、薄暗い研究室の前へと立ち尽くしていた。

目の前にある扉は分厚く、嚴重にロックされているが、彼は手馴れた様子で独自の電子キーを差し込み、暗証番号を入力していく。

そして、彼自身が発明した精神登録技術を利用し、扉を開けると、そこには多くの機材が立ち並んでおり、白衣を身に纏い、何処か神経質な感じを思い浮かばせる一人の男性がモニター上で作業をしていた。男の黒い髪の毛の中には白髪が入り混じっており、セレスよりも少し年上に見える。

彼は彼女を抱えたまま、その男性の元へと近づいて声を掛けた。

「よう。連れて来たぜ。餌となるものを」

声を掛けられた男はモニターでの作業を止め、セレスの方を振り向いた。

そして、気を失っている彼女の体を彼から受け取ると、近くにあったベットにへと寝かせて逃走できないように特殊な手錠を手足につけていく。

男はその作業の手を止めずに帰って来たセレスにへと話を始めた。

「ずいぶんと早かったですね。セレス。もっと時間が掛かると思っていましたよ」

「ふん……バカにするな、エルザ。このぐらい俺にだって出来るさ。それより、あいつの方はどうなったのか？」

軽口を叩かれたのが気に入らなかったのかセレスはどこか機嫌の悪

い様子で、神経質な感じを思わせる男　　エルザ・グレーゴルにそう言い放った。

当のエルザ自身は相手にしていないのか全く気にせずに聞き流し、奥の方にある扉を指差して彼に話を続ける。

「ああ、アマリエの事ですか？彼女なら隣の部屋で作業をしていますよ。あの方に何かの調査を頼まれたみたいで」

「ふん……そうか……。それより、こんな赤髪のカギをとっ捕まえてどうするんだ？あのソルド二人を引き寄せるだけだったら、こんなたいそれた事をしなくても、あの二人に直接襲撃すればいいんじゃないか？」

「それは……時が来てからのお楽しみですよ」

気に食わない、というよりかは不可解だ、という気持ちの方が強いのだろうか。

セレスは少し顔をしかめてエルザに質問するが、彼から返ってきた言葉からは曖昧な事しか発せられない。

これ以上聞いても無駄だと思ったのか、彼はエルザに背を向けると奥で作業をしているというもう一人の仲間の方の部屋へと足を運んでいった。

軽くノックをして扉を開けると、金髪碧眼の女性　アマリエ・エルネストがパソコンでの入力と検索作業に追われていた。

「ああ、セレス。あの女は連れてきたの？」

「指示されたとおり連れて来た。それよりそっちの状況はどうだ？」

「まあ、そんなに慌ててたら得れるものも得れなくなるわよ？ほら、

「二兎追うものは一兎をも得ずって言うじゃない？」

いつもアマリエはこのような軽い口調で話すためどうにもセレスは気に食わないが、ある目的を達する為には彼女の行動にもある程度目を瞑らなくてはならない。

彼女の軽口を聞き流すと、パソコン上に映し出されている画面へと目に移った。

どうやら画面に映っているのは、工業国として名高いこのアルマヴィオラの全国版であり、所々に赤い丸のポイントが映し出されていた。

「これは一体なんだ？」

「この国の主要とされている遺跡のポイントよ。これが無いと術式を組み合わせれないのよ」

「術式？なんだそりゃ？」

「あら、サークナイト伝記の事知らない？この国では有名な歴史で中等・高等教育の教科書にでも載ってるぐらいなんだけど？」

「俺は歴史は嫌いだったから知らない」

彼は悪びれる様子もなくあっけらかんと彼女にそう言い放つ。

その様子を見た、彼女は、しょうがないわね……と一息つく、サークナイト伝記の事についてぼつぼつと話し始めた。

はるか昔、魔物が信じられていた旧制時代。

彼らの生活は工業が発達した現代とは全く異なり、脈術と呼ばれる学問が信仰されていた。

よくファンタジー物語で出てくる魔術の系統の話と非常に似たような物で、地の脈略を理解し、術式を組み込むと、わずかな火を発したりする事が出来たらしい。

だが、それ以上の事は出来なかったらしく、ランプや電気コンロが発明されていったと同時に技術も寂れていってしまい、現在ではこの国のおとぎ話として伝えられているだけである。

「しかし、この脈術という学問には秘密があつてね……。ちょっと左の画面を見て頂戴」

アマリエはキーボードを操作し、画面の左側に何かのデータを表示させた。

どうやら古い伝記物らしく、彼女はマウスを操作し、拡大させてより見やすくさせて、再び話を続ける。

「これは脈術に関する書類よ。今は国家重要機密として保管されている貴重な書類なんだけれども……。この中にはとても面白いことが書いてあつてね。ある特別な脈術の術式を書くと、現在ある遺跡の中から特殊なエネルギーが発せられ、力を解放されると同時に世界を破滅・思い通りの世界の創造が出来るといわれているみたいな」

思い通りの世界の創造。

つまりそれは一回世界が破滅を迎えることを示している。

「じゃあ、あれか？一回世界を破滅させて、自分達の思い通りの世界が再構築できるって訳か？お前……正気か？こんなおとぎ話に騙されてお前ら二人はせつせと作業を進めているのか？俺には到底理解できないね」

「さすが、元ミーティア研究員って所かしらね。ちゃんとしたデータがないと信用できない。そんなに事実を欲しがっていたら、女に嫌われるわよ？それに……ミーティアから追放された貴方を拾ってあげたのは何処の組織かしらね？」

彼女の冷たい目が彼の瞳を捉える。

セレスはそれ以上言い返せなかったらしく、面白くなさそうに舌打ちして地面に唾を吐き捨てると、乱暴にドアを開けて彼女の部屋を後にした。

そして、作業をしているエルザを軽く見やると、再び研究室の大扉を開けて、外へと出て行った。

「本当、アマリエは人を煽るのが上手ですね」

褒めているのか貶しているのか良く分からない口調で、作業を続けているエルザは彼女のほうへと振り向かずになんか言い放った。

アマリエは何処か面倒くさそうに、作業している彼をちらりと見ると、近くにあった椅子に腰掛けて足を組み、作業している彼のモニターを見据えて言葉を紡ぎ始めた。

「……あいつは自分勝手すぎるわ。それが彼の最大の強みであり、弱点でもあるけれどね。まあ、彼は次の案件では最大に活躍してもらわないと困るし……それ以降は用済みね」

「貴女は恐ろしい人だ」

彼女の言葉を聴いて、エルザは苦笑いを含めるしかない。

そんな彼の様子に彼女は大きく気に留めていないのか、そう、一言言っただけ黙ってしまった。

そして、何かの考え込んだ後、椅子から立ち上がり、隅においてあ

った彼女の大剣を手に取り準備をし始める。

「私は今から、彼らをおびき寄せる為に向こうへと行って来るわ。フィオナの警備隊長が居なくなっただとなればさぞかし街中は大騒ぎでしょうね。エルザは引き続き、術式の構成と解明に全力を尽くして頂戴」

彼女は愛剣を背負い、彼に対して不気味に笑みを浮かべて研究所の扉を開けた。

既に日が暮れ、辺りは暗闇に包まれていたが、彼女はライトも点けずに、深い闇の中へと足を進めて消えていった。

第二十六話

アドルフとミランは本部への打ち合わせが終わった後、昼食を取る為に、店が多くひしめいているメインストリートへと向かっていた。ある一軒の店へと足を踏み入れようとした時、アドルフの持っている携帯にて何か連絡が入った。

何事かと思い、二人は足を止めて携帯の画面を見るが、携帯に表示されていた画面には見慣れない番号が表示されていた。

「ん？知らない番号からだな……」

「この市外局番は……フィオナからかね？とりあえず、出たほうがいい」

隣に居たミランは何かに気がついたように、彼の携帯の画面を見るとすぐさま電話に出るよう指示を出した。

アドルフはそれに従い、直ぐに電話を取る。

電話の主は若い男性で、後ろのほうから混乱と焦りに満ちた怒号が飛び交っており、その様子から何らかの事態が起きたことは直ぐに予想できた。

「アドルフ・クライトさんでしょうか？突然お電話をお掛けして申し訳ありません……。当方、フィオナ第一警備隊士官のイーベル・フォルクマールと申します。隊長のデスクにある連絡先から、こちらの番号が書いてあったもので……」

そういえば、ノエルが向こうへ帰るときに、何かあったらまた連絡して欲しい、と言う事で彼女に連絡先を渡していた事をアドルフは思い出した。

構わない。どうかしたのか？とアドルフは彼に対して言葉を続けさせる。

しかし、彼から聞いた事実は衝撃的なものだった。

「それが……隊長が誘拐されてしまつて」

「何だつて!？」

予想もしない答えにアドルフは思わず、大きな声を出してしまった。それと同時に、辺りにいた周りの人々は何事かと思いこちらに視線を向ける。

彼は電話口を押さえ、申し訳なさそうに、すみません、と軽く頭を下げると、今いるメインストリートから少し離れた人気のない静かな路地へと移った。

「話を途切れさせてすまない。それで、現在の状況は？」

「今のところ、犯人からの手紙や身代金等の要求は一切なく、ベネツト副隊長が隊の混乱を沈静化させるよう努力しておりますが、なかなか収拾がつかない状況になっていまして……」

「なるほど……。隊長が誘拐となると警備隊に激震が走るのも無理はないか……。しかし、なぜ手紙も何も無いのに誘拐されたとわかるのだ？」

よほど言いづらい事なのか、一瞬躊躇したように言葉を途切れさせた後、再び話を再開し始める。

「それは……犯人が隊長の部下に成りすまして、隊長本人をおびき寄せ、何処かに連れ去ったからです。私たちはその人にやられてし

まい、ただその姿を黙ってみるしかなかったんです」

ソルドなどの三組織の一般的なメンバーと同格の力を持っている警備隊。

その警備隊を持ってしても相手を捕まえなかった人物とは誰なのか、二人は直ぐに予想がついたが、自分の憶測が間違っていないかあえて彼に聞き出してみた。

「そいつは、灰色の髪に興味の悪いピアスをしていなかったか？後は……ナイフを操り攻撃してこなかったか？」

「な……！そうです！今、アドルフさんが言った特徴の人物が隊長を連れ去ったんです！なぜ、知っているのですか？」

「実はつい先日、アレシアでそいつが事件を起こして……。名はセレス・クレメンテ。さっき言った特徴の男だ。まさか、隊長から聞いてないのか？」

彼の問いに少し戸惑った様子で、エーベルは申し訳ありません……と謝った。

アドルフは、まあ、過ぎたことは仕方ない、今からの事を考えようと彼に労いの言葉を掛けるが、明らかに先ほどの件で動揺しているようだった。

彼はセレスに関する身体的特徴とある程度の情報を告げて、市内全域に外出禁止命令と一斉手配をするように指示をし電話を切った。電話の内容を隣に居たミランに伝えると、彼は厳しい表情を浮かべてもう一度メインストリートの方へと歩き出す。

「厄介なことになったな。とりあえず、今こっちで体が空いてるのはアレンだけだし、今からにでもフィオナに向かわせて……」

アドルフの提案を最後まで聞かずにミランはすぐさま待ったを掛けた。

「駄目だ。アレン君は連れて行つてはならない。それに、ソルド本部からフィオナに向かわせた方が近いはずだ。いつも情報統制が上手いお前がこんな事に気が付かないなんて、よほど動揺してるんじゃないのか？」

何かに気がついたように、アドルフは顔をミランの方に向け、目線を下に背けた。

一回深呼吸をして精神を正すと、自分が今、行った言葉に後悔の念が募ったようで、ココア色の髪が目立つ頭を軽くかき回した。

「ああ、くそっ……。まさかアレンの知り合いがこんな事になるなんて予想付かなかったから動揺しているんだな、俺……。父さん、ごめん」

「今度から気をつけてくれればいいさ。しかし、お前が仕事で動揺するなんて珍しいな……。まあ、とにかくアレン君は此处から出してはいけない。恐らく、これは敵の罠だ。彼女を餌にしてアレン君を誘き寄せる為にな」

「しかし、どうする？もしかしたら、さっきの人物がアレンに連絡を入れていたら……」

「それはこちらから再び連絡を入れておこう。もっとも彼がアレン君に連絡した後では無いことを祈るがね。そして、彼の直属の上司としての君に一つ頼みごとがある。アレシアから彼を出さないために、この地で時間がかかる任務を彼に任命して欲しい。そう……例

えば、君の友達であるフェリクス二十四時間勤務の護衛でもいい。とにかく何らかの癖をつけて彼をこの地に居座れるように手配するんだ」

「分かった。フェリクスにも頼んでみる」

彼はそう言うと、再び携帯を取り出し電話をかけ始めた。

無論、電話の相手はフェリクスである。

アドルフは簡単に事情を話すと、彼は二つ返事で仕事を引き受けてくれた。

直ぐに電話を切ると今度は先ほど掛かってきたフィオナの番号にリダイヤルする。

出たのは先ほどの声と同じ主であることからどうやらエーベルに違いなかった。

「再びすまない。エーベル、アレン・ハロルドという人物に電話を掛けたか？」

「え？アレン・ハロルドさんですか？いえ……隊長のデスク周りにそのような連絡先は見受けられませんでした……どうかされたのですか？」

「いや、掛けてないのならいい。それとその人物には電話を掛けないでほしい。これはこちらの組織の最高責任者からの命令だ。よろしく頼む」

最高責任者からの命令、という言葉聞いたからなのか、彼は言葉を飲み込み、威勢のいい返事を返して電話が終了した。

まだ連絡していないという安堵感と、いつバレるかわからない不安感が少し襲うがそれを気にしていたら組織の仕事は務まらない。

「それじゃあ、再び本部に出向こう。ミーティアにも事情を説明しておいたほうがいい。それと緘口令も敷いておかないとな」

アレシアのメインストリートにある大きなカフェ。

優雅にお茶を楽しんでいる紳士や、お昼時のランチを楽しみながら談笑している主婦の姿が目立つこのカフェで一つの視線が彼らを見つめていた。

一般的な女性としては身長は高く、百七十センチを超えている長身のプロモーションスタイルは抜群で、緩やかにパーマを掛けられた栗色の髪が彼女の綺麗な黒い瞳を輝かせ、元々の童顔を一層のこと引き立てる。

しかし、彼女の容姿とは不釣り合いに身につけられた小さな電子ブレスレットは、何処か違和感を感じさせていたが、他の客は何も気がついた様子もなく此処での一時を楽しんでいる。

彼女は手元にあったコーヒーの残りを全て飲み干し、レジにて会計を済ませると、人気のないトイレへと足を運ばせる。

トイレの個室に入った瞬間。

彼女が目を瞑ると、緩やかなパーマが掛かった栗色の髪の毛は瞬時に、ストレートの金髪へと変わり、童顔を引き立たせていた黒い瞳は碧眼の瞳へと変化する。

そう、先ほどの女性はアマリエ・エルネストその者だったのである。アマリエは手鏡を取り出し、変わった事を確認すると、彼女は一息ついて、便座の蓋の上に座った。

「本当、このブレスレット便利よねえ。どという仕組みでそうなるのか分からないけど……。エルザ曰く、まだ試作品段階だと言っ

てたけど、これだけでも十分効果を発揮できるじゃない。まあ、唯一の欠点は体のパーツを変えれないって事かしらね……。しかし、目と髪の色を変えただけで此処まで印象が変わるもんなのね。警備のザルさにも驚いたわ」

何処か楽しむ素振りを見せながら、彼女は手鏡を使い、軽く髪の毛を整えると再び言葉を紡ぎ始める。

「あのおっさん、只者じゃないわね。狙いがアレンなのが気づいてたみたいだし。全くセレスももうちょっと気を利かせたらよかったのに。あの灰色の髪に趣味の悪いピアスじゃ正体バレてもしょうがないわ。猛突突進型の奴はそこまで気が回らないのかしらね」

一息ついて立ち上がり、再び目を瞑ると、彼女の金髪はストレートの黒髪へと染まり、綺麗な碧眼の瞳は髪と同じ黒色に変化した。カバンから、黒いヘアゴムを取り出して、髪を一つに束ねる。

扉を開けて、手洗い場の前に立つて鏡を見据えると、童顔が引き立てられていた少しきついメイクを落とし、今の状態に似合った薄いメイクをして身なりを軽く整えた。

綺麗に整えられた黒髪は彼女の動作と同じ方向へ揺れ、先ほどとは全く別人の姿になった。

「一度、綺麗な黒髪にしてみたかったのよね……。さて、このままじゃ任務遂行に支障が出ちゃうし……。彼を誘き寄せるためにもう一ステップ踏まないかね」

第二十七話

一方、頼まれていた仕事が早めに終わったアレンは、ウィルの容態を見に行くため、彼の入院先へと向かっていた。

見舞いの品なのか、彼の手には林檎や蜜柑などの果物が入った袋が下げられている。

その袋を持ったままメインストリートを抜けて、横断歩道を渡ると、白く大きな建物が彼の目に映った。

「アレシア総合病院」と書いてある大きく掲げられた看板をちらりと見やると、外来用のドアを開けてエレベーターに乗り込み、彼の部屋がある六階のボタンを押す。

電光板の数は増え、アナウンスと共に目的の階へつくと、エレベーターを降りて彼の部屋へと向かう。

二回ノックをしてからドアを開けると、丁度ウィルは看護師に付き添われて何らかの検査をしていたようだった。

「あつ、すみません。検査中でしたか。」

「いえ、丁度今終わったところなので。では、これにて失礼します。また何かあればナースコールしてくださいね」

申し訳なさそうに謝るアレンの姿を見て、女性看護師はにこやかにそう返すと、検査用の道具を持って一礼し、部屋を後にした。

ウィルはその姿を見届けると、自らのベットの横に置いてある椅子をアレンに勧める。彼は荷物をベットの横に置いてある小さな机の上に置くと、その椅子に座った。

「調子はどうだ？」

「だいぶ良くなってますよ。来週辺りには退院の可能性もあるらしいです」

「そうか。それなら良かった」

アレンは安心したようにウィルに笑いかけると、ウィルも彼に伝えられるように笑みを返した。

だいぶ回復している様子に彼はホッと胸を撫で下ろす。

「それより、捜査状況の方はどうなったんですか？」

未だにメディアのニュースで取り上げられているからなのか、ウィルは心配そうに彼にそう尋ねる。

だが、聞かれた彼は首を横に振り、あれ以降、何も発展したことはない、と一言述べるしか無い。

「そうですか……。そろそろ敵側も進展があってもいい頃なんですよけどね」

「悪いな。お前の為にも、早くアイツらを見つけないといけないと思っっているんだが……」

彼の思いつめた表情を見て、ウィルはそんなに思いつめないでください、と彼を宥めた。

でも……とアレンは呟くが、その言葉をウィルは遮る。

「敵側が何もしてないということは、まだその準備ができてないって事です。焦らずじっくり行きましょう」

「全く……お前は本当に優しいな」

慰めの言葉を掛けてくれたウィルにアレンはそう言って、机に置いてあった袋に手を掛けると中から蜜柑を取り出した。食べるか？と聞くアレンにウィルは頷くと一つ渡す。そして、アレンも袋から一つ取ってから剥き始める。

剥いた蜜柑を口に運ぼうとした時、アレンのポケットの中に入っている携帯から着信が入った。

机の上に置いてあったティッシュを一枚取り、食べかけの蜜柑をそこへ置くと、ウィルに一言断り、部屋の外に出て急いで談話室へ向かう。

そして、着信表示を確認すると彼は直ぐに電話に出た。

「もしもし」

「おお、アレンか。今大丈夫か？」

電話の主は上司のアドルフのようだ。その口調はいつもと変わらない。

ただ、彼は今日、本部に向かう以外何も用事は無かったはずだ。何かあったのだろうか、とアレンは考えを巡らせると返事を直ぐに返した。

「ええ。大丈夫ですよ。どうかしたんですか？」

「実は、アレンに身辺警護を頼みたいと思ってな。私の親友のフェリクス・ウィルヘイムだ」

突然の知り合いの身辺警護の仕事に彼は一瞬戸惑った表情を浮かべるが、電話口のアドルフは構わず話を続ける。

「最近物騒なのは知っているだろう？フェリクスはミーティアの十二幹部の中でも最高幹部に値する人物なんだ。当然、そのぐらいの地位の人物ならば、防犯を強化していかなければならなくてな。警備隊の連中でもいいのだが、あの二人の襲撃の可能性となると警備に不安が残る。そこで白羽の矢が立ったのが、アレンと言うわけだ。お前なら、あの連中に太刀打ち出来るとミーティア幹部が目をつけたい。良かったな」

トントン拍子に話が進んで行くのにアレンは落ち着きを隠せず、ちよつと待つてくさい、とアドルフに一言言つと、今、怪訝に思っていることを全て話し始めた。

「ちよつと突然過ぎませんか？それに、僕は街の見回りのシフトもありますし……」

「その件に関しては私がシフト変更させてもらった。心配することは何も無い」

余りにもあつけらんというアドルフにアレンはそれ以上何も言えずにYESの返事を返すしかない。

「はあ……そうですか。警備はいつ頃からです？」

「今日の夕方頃から警護をして欲しいという要望だ。夕方六時にフェリクスがいるミーティア幹部室に行つてくれ」

分かりました、と何処か不服の表情を浮かべながら電話を切り、談話室に設置してある待合用のソファに腰を掛けると今通話した携帯電話の画面を虚ろに見つめる。

そして、彼は一回ため息をつくと立ち上がるとウィルのいる病室へ

と戻っていった。

「どうかしたんですか？」

出て行く前とは違う彼の表情を見て何か感づいたのか、ウィルは心配そうに声を掛ける。

アレンは、要点を掻い摘んで、先ほどのアドルフの電話の内容を話し始めた。

彼から全ての話を聴き終えたウィルも怪訝そうに顔をしかませている。

「確かに話の筋は通ってますが……。何故今更？警護するのならば、私たちの襲撃事件があった次の日からしたほうが良かったのに……」

既にあの時の襲撃事件から一週間が経過している。

このタイミングでミーティアの最高幹部の警護をするという指示内容を彼らが不思議に思うのも無理は無いだろう。

「まあ、仕事だと言うのなら行くしか無いな。そろそろ夕方の五時前だし……。このまま外に出て本部に向かうよ」

そう言っアレンは食べかけの蜜柑を全て食べてから椅子から立ち上がる。

持ってきた果物類を冷蔵庫の中にしまい、じゃあ、また来るからな、と言、アレンはウィルに微笑み掛けると彼の病室を後にしたのだった。

第二十八話

病院を出たアレンは、依頼された仕事に向かうため、ミーティア本部の方へと歩き出す。

此処から本部まではそう遠くはなく、歩いて十分足らずで目的の場所へとついた。

玄関前にいる警備員に、ソルドの身分証明書を見せて中に入る。

既に何度も出入りしているからなのか、受付にいる事務処理担当の職員達はアレンの姿を見ても何も言うことはない。

受付を通り過ぎ、幹部たちが集まる会議室へ足を運んで扉をノックしようとした時、突如、背後から声を掛けられた。

「おお、アレン君」

書類を持ち、いつも通りにこやかな表情を浮かべて立っていたのは、依頼主であるフェリクスだった。

彼はドアを開けて、手に持っていた書類を自らのデスクに置くと、アレンを部屋に通す。

そして、彼に席を薦め、座ったのを確認すると、自らも腰を掛け、今回の仕事内容について話を始めた。

「突然、呼んで申し訳ないね」

「いえ、大丈夫です。しかし、いきなりの呼び出しで……一体何かあったんですか？」

「あの事件以降、責任者が幹部の警備が義務付けられていてね。ミーティアの職員達が警備に当たっているのだが、どうしても人員が足りなくてね。」

応援としてアレン君に来てもらったというわけだ」

なるほど、とアレンは一回頷くのを確認した後、フェリクスは持っていた資料を彼に一枚渡した。

一番上のタイトルには今回の仕事内容について、と書かれてあり、アレンは項目にザッと目を通す。

実労時間は約九時間ほどで、基本的にはフェリクスの警護というよりは補佐役として仕事を手伝うということらしい。

「警備と聞いていたから、もっと過酷な仕事かと思っていましたよ」

アレンは安堵した表情で目の前にいるフェリクスにそう話しかける。警備の仕事は対象者のためにかなりの神経を使う上に、時間も長く拘束される為、通常の仕事以上に大変だということは、彼も以前の仕事の経験上よく知っていたからだ。

フェリクスは、確かにそうだな、と頷くと再び話を紡ぎ始める。

「私はあまり出張することは少ないから、アレン君が思っているよりは楽な仕事な方かもしれないね。」

ただ、今回は補佐と言う事で、書類整理を手伝ってもらわないといけないんだけれども……」

彼はそう言つて、机の奥のほうから地図や依頼書などの重要書類を引っ張り出していく。

しかし、書類の量は思っていたよりも多く、彼の机の上全体を埋め尽くしてしまった。

アレンはその様子に少し顔をしかめるが、当のフェリクスはその量に慣れているのか全く動じない。

書類の束を彼の元に置くと、フェリクスはいつも通りの表情で話しかける。

「じゃあ、この第二重要書類を全て整理して、私の名前でサインを
していつてくれないか？」

「あー、疲れた」

時刻は午後九時過ぎ。

この時刻になると夜勤担当の職員しか残っておらず、とても静かだ。
アレンは疲労の色を見せながら背伸びをした後、椅子から立ち上がる。

窓の外からは綺麗な夜景が映っており、アレシアの夜の街並みがよく見えた。

フェリクスは、彼にお疲れ様、と一言言うと、机の上に温かいコー
ヒーの入ったカップを差し出した。

彼は置かれたコーヒーカップを手に取り、ミルクを入れて啜ると、
大きく息を吐いた。

「まさか、書類が此処まであるとは思いませんでしたよ」

彼がそう思うのも無理は無い。

あの後、彼は百枚足らずの書類に目を通し、サインと印鑑を押して
いったからだ。

疲労で痛むのか、カップを置き、右腕を回す。

フェリクスは自らの書類を机の中に片付けながらも、彼の方を向い
て話を始めた。

「あれはいつもより書類が少ない方だったんだけどね。いつもは二

倍ぐらいあるから」

二倍！？とアレンは驚きの表情を浮かべ彼の方へ振り向く。彼のリアクションが少し面白かったのか、フェリクスは片付けていた手を止めて思わず吹き出してしまった。

その様子にアレンは頬を膨らませ、そんなに笑わないでくださいよ……一言呟くが、フェリクスの笑いは止まらない。

やがて、フェリクスは一呼吸置いて笑いをやめると一言謝った。

「ごめんごめん、ちょっとアレン君の表情が本当に素で面白かったから……」

「全くフェリクスさんもアドルフさんと同じじゃないですか……」

発言が気になったのかフェリクスはどういう事だね？と聞き返すと、アレンはカップを取り上げ、再び口に含みながらもその理由を話し始めた。

「アドルフさんも、僕の事をそうやって笑うんですよ。お前は面白いな、とか言って」

「はは、アドルフらしいな。あいつは人をいじるのが好きだからな」

昔の事を思い出したのか、フェリクスは懐かしそうな表情を浮かべ、窓の外に映し出されている夜の街並みを映し出しているアレシア市内を少し見据えながらも、自らが作ったコーヒーを一気に飲み干した。

既にアレンのカップが空になっているのに気づいたフェリクスは、もう一杯飲むか？と薦めるが、寝れなくなりますので、と彼はやりわりと断る。

その返事にフェリクスは、そうか、と答え、ドアを開けて隣の給湯室に使ったコップを持ち運ぼうとした時、すかさずアレンは手伝おうと彼を静止させた。

「僕がやるからいいですよ。フェリクスさんは部屋にいてください」

「いや、最初に持ち運んだのは私だからね。アレン君は帰りの準備をしておいてくれないか」

声を掛けられたフェリクスはいつも通り穏やかな表情を浮かべると隣にある給湯室へとコップを持ち運んだ。

スポンジに洗剤をつけて水洗いをして水を切ると、備え付けのタオルを手にとって丁寧に拭き、棚の中に戻すと、アレンがいる部屋に戻ってきた。

アレンは言われたとおり、入れてあった専用ロッカーから荷物を取り出し、既にコートを着込んでいる。

フェリクスも彼の隣にあるロッカーを開けて荷物と上着を取り出す。

「じゃあ、帰ろうか」

窓の戸締りを確認しドアを開けて外に出ると、フェリクスは専用の鍵でドアをロックすると二人は廊下を歩き、受付の前を通り過ぎた。そして、綺麗な夜空と色とりどりのネオンが浮かぶアレシア市内へと歩き始めた。

第二十九話

「家まで送りますよ？」

本来のアレンの仕事はフェリックスの護衛だ。

アレンは彼の身を案じてそう言うが、対するフェリックスは繁華街の近くで、いや、此処でいい。アレン君も気をつけて帰ってね、と言いうと、色とりどりのネオン街並みへと消えてしまった。

フェリックスさんも意外と飲みに行くんだな、と心のなかでアレンはそんな感想を抱きつつも、夕飯用のご飯を近場のコンビニで買っと、その袋を下げたまま彼は借りているアレシアの寮へと歩き進めていった。

「ただいま」

誰もいない真っ暗な部屋の中で彼の声は木霊する。

アレンは靴を脱ぎ電気を付けると、荷物は全て机の上へ置いた。着ていた組織服も着替えると一息ついてソファアの上へと腰を下ろす。何気なく、テレビのリモコンにスイッチを入れてチャンネルを回してみるが、あまり面白い番組はない。

適当な番組にチャンネルを合わせると、アレンは買ってきた唐揚げ弁当を取り出して口に運び始めた。

（そういえば、ノエルどうしてるのかな）

此処一週間、彼女から連絡が全くない。

いつもなら週に一回程度は向こうから連絡を取ってくれており、恐らく今回は仕事が忙しいのだろう、と彼は思うが、彼女の性格からして、一週間全くメールも電話などの連絡が無いのは少し不気味に

感じる。

久々にこちらから電話してみようか、とアレンは思い立つと、懷からプライベート用の携帯電話を取り出すと、彼女に電話を掛けた。しかし、彼女の携帯は電源が切られているのか「おかけになった電話は現在電波の届かない場所にあるか電源が切られており」「のアナウンスが繰り返されるだけだ。

（出ないな……。寝てるのか……。？）

時刻はまだ十時過ぎだが、警備隊長という職務の都合上、早朝勤務が多い。

その為に早く寝ているのだろうか、とアレンは思考を巡らせると、持っていた携帯を閉じると再び懷へしまい込む。

付けているテレビをBGMにしながら、残っている弁当を食べ進めていった。

翌日。

昨日は遅めの夕飯と摂った後、風呂に入って即座に寝てしまったらしい。

まだ時刻は朝の六時頃で、九時の勤務からまだ時間がある。

彼は起き上がって直ぐに身支度を整えると、長い黒いコートを羽織り、外へと出かけた。

外を出てアレンが向かった先は、この近くにある露店街だった。

朝が早いものにも関わらず、既に人が多くひしめいていた。

ヴィオラの露店街よりもはるかに店は並んでおり、近くのテーブルでは仕事前に一服しようとしているサラリーマンなどがよく目立つ。アレンは軽食専門の露店へ向かい、ハムとチーズの入ったホットサ

ンドと温かいブラックコーヒーをテイクアウト注文すると、食事前のテーブルに座り食べ始めた。

「アレン、珍しいじゃないか」

そう声を掛けてきたのは上司であるアドルフだった。

彼の手にはアレンと同じ、ハムとチーズのホットサンドが握られており、一緒に席いいか？とアドルフは聞いて、アレンが頷くのを確認すると向かいの席へ腰を下ろした。

「お前、いつも遅刻するときに言っていた朝に弱いつて話は嘘だったのか？」

「いや、今日はたまたまですよ」

上司の疑いの視線にアレンは、本当ですよ？と言ってホットコーヒーを啜る。

まあ、そんな日もあるか、とアドルフは勝手に自己完結すると、彼に向かって話を紡ぎ始める。

「仕事の方はどうだ？」

「結構、楽しいですよ。それにフェリクスさん優しいですし」

「まあ、確かにフェリクスは良いやつだからな。しっかり護衛の方頼むぞ」

護衛と言うより補佐みたいな感じですけどね、とアレンは言つと最後の一切れのホットサンドを飲み込んだ。

そして、コーヒーを飲み干すと片付けるために席を立ち上がる。

「もう行くのか？」

「ええ。アドルフさん忙しそうですから」

アドルフが開いていた黒い手帳に気がついたのだろう。

そのスケジュール帳にはぎっしりと予定が詰め込まれている。

「事件から二週間経って、ようやくアレシアの日常も戻ってきたよ
うだが警戒レベルは下げられないしな。それに俺が忙しくない
と組織は回らない。まだ時間はあるんだろう？そうも言わずにも
うちよつと居ろ。俺も朝はゆっくりしたいしな。そのクレープ屋
で好きなもん買ってこい。俺のはチョコバナナクレープでいいから」

突然、銀貨一枚を渡されてアレンは彼に返そうとするが受け取ろう
としない。

これが上司なりの部下への愛情表現なのだろうか、とアレンは思考
を巡らせながらも、クレープ屋へと足を運んだ。

言われた通りクレープ二つを買い、アドルフの元へと戻る。

しかし、彼らが楽しく話をしながら食べ進めていると時刻は既に八
時を回ってしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1615g/>

Ein Band der Rache

2011年11月20日07時19分発行